

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和48年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001201

昭和 48 年度

国立国語研究所年報

—25—

国立国語研究所

1 9 7 4

刊 行 の こ と ば

本書は、昭和48年度における研究および事業の経過について述べたものである。

48年度に刊行したものは次のとおりである。

日本語地図(6) (報告30—6)

電子計算機による国語研究 (VI) (報告51)

地域社会の言語生活 (報告52)

言語使用の変遷 (報告53)

牛渡
雑誌安愚楽鍋用語索引 (資料集9)

ことばの研究第4集 (論集4)

ことばの研究第5集 (論集5)

国立国語研究所年報—24— (昭和47年度)

国語年鑑 (昭和48年版)

昭和49年6月

国立国語研究所長

岩 淵 悦 太 郎

目 次

刊行のことば

昭和48年度の調査研究のあらまし	1
現代語の文法の研究—文体と文法との関係—	6
全国方言文法の対比研究	16
発音過程に関する研究	18
図形および文字の知覚および認識機構の研究	20
語彙論上の諸問題に関する調査・研究	21
日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査—	22
所属集団の差異による言語行動の比較研究	23
現代児童・生徒の言語能力の動態調査	25
就学前児童の言語能力に関する全国調査	29
言語の表現機能と伝達効果の研究	31
明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究—	32
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	39
漱石・鷗外の用語の研究	42
社会構造と言語の関係についての基礎的研究	44
各地方言親族語彙の言語社会学的研究	46
現代語の表記法に関する研究	
—新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究—	48
電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—	52
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	54
科学研究費補助金による研究	62
図書の収集と整理	63
庶務報告	64

昭和48年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次のとおりである。

- | | |
|----------------------------|----------|
| (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係— | 話しことば研究室 |
| (2) 全国方言文法の対比研究 | 話しことば研究室 |
| (3) 発音過程に関する研究 | 話しことば研究室 |
| (4) 図形および文字の知覚および認識機構の研究 | 話しことば研究室 |
| (5) 語彙論上の諸問題に関する調査・研究 | 書きことば研究室 |
| (6) 日本言語地図作成のための研究 | |
| —作図ならびに検証調査— | 地方言語研究室 |
| (7) 所属集団の差異による言語行動の比較研究 | 地方言語研究室 |
| (8) 現代児童・生徒の言語能力の動態調査 | 国語教育研究室 |
| (9) 就学前児童の言語能力に関する全国調査 | 国語教育研究室 |
| (10) 言語の表現機能と伝達効果の研究 | 言語効果研究室 |
| (11) 明治時代語の研究 | |
| —明治初期における漢語の研究— | 近代語研究室 |
| (12) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 | 第一資料研究室 |
| (13) 漱石・鷗外の用語の研究 | 第一資料研究室 |
| (14) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究 | 第二資料研究室 |
| (15) 各地方言親族語彙の言語社会学的研究 | 第二資料研究室 |
| (16) 現代語の表記法に関する研究 | |
| —新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究— | 第三資料研究室 |
| (17) 電子計算機による語彙調査 | |
| —新聞を資料とする— | 言語計量調査室 |
| (18) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理 | |

- (1) 現代語の文法の研究—文体と文法との関係—……比喩表現をとりあげ、

言語形式と比喩的転換の性格とを規準として分類整理を行う。文学作品から採集した比喩表現例を、比喩であることのわかり方の違いによって3分類し、それぞれを表現形式の言語的性格に基づいて小分類する。本年度は、報告書にするためのデータづくりとその整備を進めた。

(2) 全国方言文法の対比研究……昭和41年度から3年間にわたって行った全国方言の文法に関する調査の結果について整理を進める一方、44年度からの5か年間に史的価値の高い方言の録音とテキスト化を、各地の研究者の協力を得て行った。同時に、それら方言の文法についての記述的な研究を進めた。

(3) 発音過程に関する研究……前年度に引き続き、日本語の種々の音声を発音する時の音声器官の運動を、X線映画フィルムによって分析したほか、音韻論の理論的な研究、発音指導の方法についての研究などを行った。

(4) 図形および文字の知覚および認識機構の研究……本年度は7年計画の第2年次として、文献上の調査のほか、眼球運動の測定装置、反応時間の測定装置などの、実験研究に必要な機器を整えた。

(5) 語彙論上の諸問題に関する調査・研究……かなり同義的な類義語の数十組について、どう違うか、ふつうどの語を使うか、どの語を好むかなどを、質問紙により、中年層について東京と大阪で調査集計した。また、前年度の老人層と青年層の調査結果を合わせて、全体について集計・分析を始めた。

(6) 日本言語地図作成のための研究—作図ならびに検証調査—……『日本言語地図』第6集（最終巻）を刊行した。検証調査は、都合により行わなかった。来年度には、この研究の収束作業が行われる。

(7) 所属集団の差異による言語行動の比較研究……『地域社会の言語生活—鶴岡市における20年前との比較—』（報告52）をまとめ、刊行した。別に、鶴岡市で事例調査、アクセントの調査を行った。

(8) 現代児童・生徒の言語能力の動態調査……現代児童・生徒の言語能力を主として文章表現力の動態を明らかにすることを目的とした3か年の継続

調査である。本年度は最終年次にあたり、小学校6年生約700名を対象にして文章表現力調査、表現行動調査、作文指導法調査を実施した。一方、中学校調査は前年度の本調査に続いて補充調査を実施した。

- (9) 就学前児童の言語能力に関する全国調査……昭和42年度より着手し、以後引き続き継続してきた諸調査のうち、本年度は文法・コミュニケーション能力調査の補充調査を完了し、報告書作成のための集計分析を行った。
- (10) 言語の表現機能と伝達効果の研究……本年度も前年度に引き続き、「文の形成過程に現われる伝達機能の発達の研究」を行った。今年度は、複文構成の問題の研究と、形態論的、連語論的な分析を進めた。
- (11) 明治時代語の研究—明治初期における漢語の研究——明治初期の各種文献に現われた漢語の実態を明らかにするため、翻訳小説『欧州奇事花柳春話』（漢文直訳体）と『通俗花柳春話』（和文体）とについて語彙表を作成し、両作品に現われた漢語の分析を進めた。また、参考資料として作成した『安愚楽鍋用語索引』を刊行するとともに、近代語研究資料の調査を行い、資料目録『国立国語研究所蔵明治文庫目録（付）逐次刊行物明治期目録』を作成し、印刷した。
- (12) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究……用語検索のシステムを作成し、新聞語彙調査データをはじめ、各種の入力データについて、単語単位、文節単位、さらにはセンテンス単位の、多様な検索結果を得て、言語情報処理の基礎的な研究を行うことを目ざしている。また、日本語データの性格を把握するため、文字連続の統計的調査や、語句の連接形態の研究を進めている。
- (13) 漱石・鷗外の用語の研究……電子計算機によって、漱石・鷗外の作品の索引を作成するとともに、その分析を行うもので、現在、諸作品のかたかなによる索引と、漢字プリンターを使用した漢字かなまじり文による索引とを作成している。すでに索引ファイル（磁気テープ）の完成したものは『三四郎』『高瀬舟』『寒山拾得』『硝子戸の中』『行人』『雁』の6作品で、現在作成作業中のものは『青年』『山椒大夫』『坊ちゃん』『草枕』『渋江抽

斎』の5作品である。

- (14) 社会構造と言語の関係についての基礎的研究……福島県北部地域における、これまでの調査の整理を行った。面接調査の結果について一往の分析を行い、『言語使用の変遷—福島県北部地域の調査—』（報告53）を刊行した。
- (15) 各地方言親族語彙の言語社会学的研究……全国各地の方言集・方言辞典・民俗誌・村落調査報告書その他の文献から方言の親族語とその意味用法に関する記述の部分を転写採集し、分類整理をした。また、島根県隠岐郡西ノ島町と千葉県長生郡一宮町の2地点で臨地調査をした。
- (16) 現代語の表記法に関する研究—新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究—……新聞語彙調査の漢字表記の実態を明らかにするため、漢字表記語台帳を作成し、漢字表作成のための作業を行った。また、かな書き語についても、かな表記語の一覧表の作成を進めた。
- (17) 電子計算機による語彙調査—新聞を資料とする—……この調査で得られたデータの一部につき同語異語の判別を行い、音素連続の品詞別分析、動詞用法の分析記述などを行った。
- (18) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理……例年の通り新聞・雑誌・単行本について調査し、『国語年鑑』の資料として整理した。

なお、上記の研究のほかに、文部省科学研究費補助金の交付を受けて、以下の研究を行った。

一般研究（B）電子計算機による総合語彙表作成のための基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）……古典の総合語彙ファイルを作成するため、前年度に引き続き、既成の用語索引12種を漢字かなまじりで入力し、紙テープを作成した。また、これまでに索引の作られていない三つの作品につき、かたかな文脈つきの用語索引を作成した。

本年度の研究組織は次の通りである。（昭和48年4月1日現在）

◇第一研究部 部長 野元 菊雄

話しことば研究室 上村 幸雄（室長） 中村 明 高田 正治

神部 尚武

書きことば研究室 西尾 寅弥（室長） 宮島 達夫（外国出張中）

地方言語研究室 徳川 宗賢（室長） 本堂 寛 佐藤 亮一

高田 誠 江川 清

◇第二研究部 部長 芦沢 節

国語教育研究室 村石 昭三（室長） 根本今朝男 天野 清

言語効果研究室 高橋 太郎（室長） 大久保 愛

◇第三研究部 部長 斎賀 秀夫

近代研語究室 飛田 良文（室長） 梶原滉太郎

◇第四研究部 部長 林 四郎

第一資料研究室 田中 章夫（室長） 中野 洋 鶴岡 昭夫

第二資料研究室 飯豊 毅一（室長） 渡辺 友左

第三資料研究室 土屋 信一（室長） 野村 雅昭

言語計量調査室 石綿 敏雄（室長 外国出張中） 斎藤 秀紀 村木新次郎

現代語の文法の研究

——文体と文法との関係——

A 目 的

現代日本語の文法現象が、特に文体の形成にどうかかわりあうか、という観点から、比喩表現をとりあげ、言語形式と比喩的転換の性格とを規準として、比喩技法の分類整理を実例によって行う。

従来、比喩法は修辞学のテーマとして、いろいろな分類がなされてきた。

まとめてみると次のようになろう。比喩というと、ほとんどの修辞学書が共通して立てるのが、まず、直喩（明喩）・隱喩（暗喩）・諷喩（寓喩）の三つである。これに、活喩（擬人法と部分的に一致）・提喩・換喩のほか、声喩（onomatopoeia）をあげる書も多く、また、さらに、引喩・張喩・字喩・詞喩・類喩を加える場合もある。しかし、この種の分類では、その観点が多元的なためもあって、それぞれの喩法に属するための条件がじゅうぶんに排他的でなく、また網羅的でもない。典型的な例はともかく、実際の用例をあつかうと、いろいろな困難にぶつかる。どちらの喩法に属するか決めがたい例、明らかにどちらの条件をも満たす例、あるいは、どれにも属さないと思われる例も現われる。さらに、この修辞学的に立てられた喩法のなかには、形式と意味との対応の転換機構が異質なものや、比喩としての共通性格が疑わしいものも含まれている。表現主体に、その言語形式が直接にさし示す事からの事実性を否定する（「雪の肌」を例にとれば、実際には＜雪＞でない、という）意識があり、受容主体が、その言語形式の基本的な用法からの逸脱を意識すること、を条件とするかぎり、比喩の成立は主として思考形式に依存するが、その分類は、できるだけ表現形式の言語的な性格を規準とすべきであろう。

B 方 法

1) 比喩を次のように定義した。

表現主体（言語表現の送り手。つまり、話し手および書き手。）が、表現対象（「雪の肌」の例では、＜白い＞）を、それ（＜白い＞）を過不足なく直接にさし示す言語形式（「白い」）を使わないで、その代わりに、言語的な意味（その言語形式の字句どおりの意味）では他の事物・事象（＜雪製の＞、＜雪所有の＞など）に対応する言語形式（「雪の」）を提示し、その言語的環境との異和感や、それが現われることの意外性などで、受容主体（言語表現の受け手。つまり、聞き手および読み手。）の想像力を刺激して、両者（「雪の」の基本的な意味とその場での臨時の意味）の共通点を推測させることによって、間接に伝える表現技法である。

そして、それは、表現効果のうえで、次のような特性があると予想することができよう。

ストレートな表現（この例でいえば、「白い肌」）と論理的情報（その言語形式が外界のどういう事実をさし示すか）は同じだと考えたとしても、比喩表現の場合は、受容過程（＜雪＞にそなわっているいくつかの属性のなかから＜白い＞を選びとる）で捨てた他の属性（＜冷たい＞、＜溶けやすい＞、＜やわらかい＞、＜雪独特の感触＞など）が、それを捨てる際に、否定的にもせよ、ともかくなんらかの形で受容主体の意識をとおりぬけるので、形象（受容主体がそのスタイルに応じて思い描く＜白い肌＞）の背後にうっすらと消えのこる淡い映像をとまなう点で、少なくとも感性的な差がある。

- 2) 文学作品（日本の近代および現代の代表的な口語体小説）50編から、比喩表現に関連する用例を、担当者の言語意識にもとづく内省的方法によって採集し、カード化する。（くわしくは『年報21』参照）
- 3) 受容主体がある言語表現に接したときに、それをなぜ比喩だと考えるのか、という立場を基本的な観点とし、その際の、比喩であることのわかり

方のちがいを規準として、2)によって得られた約3万の用例を、次の3類に第一次分類する。

第1類（指標比喩）：受容主体が表現主体の比喩意識を感じとる手がかりになる（比喩の成立に直接形式的に関与している）特定の言語形式をそなえた（第2類のような2項の関係の特異性ではなく、他から独立に抽出できる）比喩表現である。

〈例〉 まるで顕微鏡でものぞくみたいに＜曾野綾子「遠来の客たち」

〈例〉 その霏は月光を吸いちように荒絹のようにぼんやりと照っていた
＜壇一雄「花筐」

第2類（結合比喩）：ある言語単位（接辞・造語成分・語・句など）間の結びつきに、慣用からの顕著な逸脱や非論理性の見られる比喩表現である。

〈例〉 着物一ども ＜宇野浩二「蔵の中」

〈例〉 空一よ ＜遠藤周作「海と毒薬」

〈例〉 どす黒い一臭い ＜佐藤春夫「田園の憂鬱」

〈例〉 吃り吃り一咲き出す ＜三島由紀夫「金閣寺」

〈例〉 立場が一悲鳴を渡らす ＜井上友一郎「ハイネの月」

〈例〉 情氣を一扱き上げる ＜岡本かの子「母子叙情」

第3類（文脈比喩）：言語形式の内部に比喩性をもたず、それがある文脈におかれたときに、主として先行表現との関係で（その表現の基本的な言語的意味ではむしろ関連をもたないことを契機として、それとはちがうその場での個別的な意味を推測させることにより）、その全体が比喩として成立する表現で、単位の大きな（だいたい文以上）結合比喩と考えることもできる。（ただし、結合比喩は連語論などの語彙＝文法的な研究成果にもとづいて、近い将来にかなり客観的な処理が可能になると思われるが、文脈比喩のほうは、意味論的文章論というきわめて困難な分野、さらには作品全体を対象とする文学研究そのものとも学問的に交渉をもたねばならないので、レ

ベルのうえで両者を分けておくべきだと考えたわけである。)

〈例〉 芸なし猿(人間) <幸田文「流れる」

〈例〉 血が逆流をはじめる(ショックの強さ) <丹羽文雄「顔」

〈例〉 浅瀬を渡る(女性関係の程度) <川端康成「雪国」

4) 指標比喩を次の手順で分析する。(具体的には前号参照)

- ① 比喩表現から比喩形式を抽出する。
- ② 比喩形式から傾向環境を捨象する。
- ③ 実現形を基本形に置換する。
- ④ そのときに得られた型を比喩パターンとして立てる。
- ⑤ 比喩パターンを構成している個々の要素を比喩マークとして登録する。

5) 指標比喩を比喩パターン(比喩マークの組合せ)によって分類する。

6) 結合比喩を次の手順で分類する。

- ① 結合比喩を構成している各要素(単位は、主として語、場合によって句や造語成分・接辞)の文法的性質にもとづき、その組合せによって分類する。

〈例〉 名・名, 名・名・動, 名・形, 副・動

- ② 構成要素のうち、比喩の成立に直接関与しているズレの結合の種類(名詞を構成要素にもつ場合は、その格を考慮)によって分類する。

〈例〉 名ガ 他, 名ヲ他, 名ガ名ヲ他

時間 囲む 仮面試運転する 匂い青春包む

- ③ 意味を考慮に入れて、そのなかをさらにグループに分ける。

〈例〉 名ガ 自 名ガ 名ヲ 他

死	来る
連想	来る
眼	引き返す
笑い	うかぶ
嗤い	うかぶ
微笑	うかぶ
陰影	浮び出る

海	気持	押しかくす
火	身	隠す
苦しみ	愛	殺す
死	記憶	殺す
死	情熱	殺す

姿 目 心	浮き上る 沈む 沈む	失敗 こと こと	生涯 精神 神経	傷つける 傷つける 傷つける
-------------	------------------	----------------	----------------	----------------------

- ④ 結合のズレが慣用的に固定したもの、および、それに準ずるものは、しるしをつけて区別する。

〈例〉 水が光ヲ砕く △心理ヲ掘り出す ○丘が美ヲ湛える

7) 文脈比喻を次の手順で分類する。

- ① その表現を構成している品詞によって分類する。
- ② その中を格助詞や接続助詞の種類と順序によって分類する。
- ③ 同型のものは構成要素の意味によって、グループに分ける。
- ④ 表現と意味とのズレが慣用的に固定したもの、および、それに準ずるものは、しるしをつけて区別する。

C 担 当 者

話しことば研究室の中村明が担当し、林実知代（48.4.1 第一資料研究室から配置転換）が、分類された用例の整理、表の作製、比喻関連文献の収集などの面で、その研究をたすけた。

D 前 年 度 ま で の 成 果

- 1) 用例出典一覧（用例採集に使用した作品を一覧できるように、「日本の文学」中の巻名・箇所・ページ数・作品名・略号・作者名を表形式にまとめたもの）を作成した。

<見本>

巻	箇所 (pp.)	ページ数	作 品 名	略 号	作 者 名
7	5—781	777	夜明け前	夜	島崎藤村
42	117—177	61	風立ちぬ	立	堀 辰 雄
76	349—376	28	死者の奢り	死	大江健三郎

- 2) 比喻マーク分類一覧を次の手順で作成した。

- ① 比喻マークを品詞その他の文法的性質によって類に分ける。

② 各類のなかを意味・機能によって種に分ける。

③ 各種に属するマークを形式や意味・性質などの似ているものがグループをなすように配列する。

<見本>

D 類	E 類	J 類	K 類	M 類	R 類	S 類
D ₁ 感ジル・ タトエル AヲBニ・ ト～ 1 感じる 8 見る	F ₁ マルデ ～AハBノ ヨウダ 2 さながら 4 ちょうど	J ₁ ホド 〔比較〕 2 くらい 4 より J ₂ デモ 〔ボカシ〕 3 かなにか J ₃ サエ 〔並列強調〕 3 だって	K ₁ 近イ・ 同ジ AハBニ・ ト～ AトBトハ ～ 2 等しい 4 そっくり だ K ₂ 同様 AハBト～ AトBトハ ～ 2 同列 9 変わらない い K ₃ ヨウ 〔比況・推 定〕 3 みたい	M ₂ ヨウス ・形・ グアイ 〔外見・関 係〕 2 気配 12 あんばい M ₃ 感ジ・ 気持ち 〔感覚・心 理〕 4 気 8 心地 M ₄ 代ワリ ・役目 AハBノ～ ラスル 2 役割 4 代わり	R ₁ ヘタナ ～…ヨリ 2 どんな R ₃ イワユ ル〔限定〕 2 ほんの 3 ほんとの R ₄ 一種ノ 〔同類〕 2 ある種の 4 第二の	S ₁ …バリ B～ノA 12…はだ 14…なみ S ₄ …紛イ 〔動詞転成〕 1…気どり 3…扱い S ₈ …サナ ガラ 〔副詞化〕 1…そのま ま 3…よろし く
D ₅ 感ジラ レル AガBニ・ ト～ AガBダト ～ 3 思える 5 考えられ る 相当ス D ₁₃ ル 類スル AガBニ～ 1 当たる 4 類する	F ₂ イワバ ～AハBダ 4 言ってみ るなら 9 たとえて 言う F ₄ マサニ Aハ～Bダ 〔近似強調〕 2 まったく 4 どう見て も	J ₄ CガD ナラAハB 〔比例〕 3…を…と すれば…は …				

〔注〕 Dは動詞, Fは副詞, Jは助詞, Kは形容詞, Mは名詞, Rは連体詞, Sは接辞からとった略号である。それぞれ厳密な品詞分類ではなく、それによって代表される性格・機能を比喩の成立においてはたしていると思われる語句をまとめたものなので、品詞名をおもてに出すことを避けた。

3) 比喩マーク索引(各比喩マークを五十音順に配列し、比喩マーク分類一覧中の位置を表示したもの)を作成した。

<見本> 1 相似る C₁₂₋₂ 5 …扱い S₄₋₃ 6 扱う D₁₋₁₅ 43 思い M₃₋₁₀ 48 思い

出させる D₇₋₃ 49 思い出す D₁₁₋₁ 129 さも F₁₋₆ 367 を見れば F₁₄₋₂

4) 比喩パタン索引(各比喩パタンを五十音順に配列し、記号によって指標比喩分類一覧中の位置を表示したもの)を作成した。

<見本> 1 あたかも・相似る F₁₋₃ D₁₂₋₂ 2 あたかも・かなにか・よう F₁₋₃ J₂₋₃

K₉₋₁ 3 あたかも・ごとし F₁₋₃K₉₋₂ 569 まるで・よう・思い F₁₋₁K₉₋₁

M₃₋₁₀ 737 を見ると・感じられる F₁₄₋₁D₅₋₁

- 5) 比喩形式索引(各比喩形式を五十音順に配列し、記号・番号によって比喩パタンとの関係を表示したもの)を作成した。

<見本> 2 あたかも・かのように F₁₋₃K₉₋₁・1 3 あだかも・かのように F₁₋₃

K₉₋₁・2 161 かりに・譬えて見たら・とでも言うべき F₉₋₁D₁₋₁₂J₂₋₁D

₃₋₁・1 1174 んばかりの思い J₁₋₃M₃₋₁₀・1

E 本 年 度 の 成 果

- 1) 指標比喩分類一覧を作成した。

<見本> K J D 16—27

K₉J₃D₁ 3—3

K₉₋₁J₃₋₁D₁₋₂よう・も・思う 1—1 [顔1]

K₉₋₁J₃₋₁D₁₋₂・1 ようにも思った 1—1 [顔1]

掌中のたまが汚されたようにも思った [顔]

K₉₋₁J₃₋₄D₁₋₁よう・さえ・感じる 1—1 [く1]

K₉₋₁J₃₋₄D₁₋₁・1 ようにさえ感じる

自分の将来を突きつけられたようにさえ感じるのであった。[く]

K₉J₃D₅ 13—19

K₉₋₁J₃₋₁D₅₋₉よう・も・見える 5—7 [母2く2杏1冬1草1]

K₉₋₁J₃₋₁D₅₋₉・1 ようにも見えた 2—3 [母2草1]

瞬き盛りの銀座のネオンは…谷に人を追い込めて、宵かしたぶ
らかす妖精群のようにも見えた。[母]

- 2) 比喩マーク別出現状況一覧を作成した。

<見本> F₁₋₁ まるで 32—374

～ まるで 3—18 (まるで13—18)

～D₅₋₉まるで・見える₂₋₂(まるで・としか見えなかった₁₋₁まるで・に
見え₁₋₁)

F₁₀₋₂～K₁₁₋₃それでは・まるで・ではないか₁₋₁(それではまるで・で

はないか₁₋₁)

～ J₂₋₁K₉₋₁M₂₋₁ まるで・でも・よう・ようす₁₋₁ (まるで・でも・よ
うな様子₁₋₁)

～ S₈₋₂ まるで・…さながら₂₋₂ (まるで・…さながら₂₋₂)

3) 比喩マーク種別出現状況一覧を作成した。

<見本> F₄ マサニ 16—40

～ まったく₂₋₂ (まったく₁₋₁全く₁₋₁)

ほんとうに₁₋₂ (ほんとに₁₋₂)

～ D₅ ほんとうに・疑われる₁₋₁ (本当に・かと疑われた₁₋₁)

どう見ても・見える₁₋₁ (どう見ても・かに見える₁₋₁)

～ J₃K₁ それこそ・も・等しい₁₋₁ (それこそ・にもひとしい₁₋₁)

～ K₉ まさに・よう₃₋₄ (まさに・ような₂₋₂まさに・ように₂₋₂)

文字通り・よう₁₋₁ (文字通り・ような₁₋₁)

4) 比喩マーク類別出現状況一覧を作成した。

<見本> K 50—6017

D～ 8—17

D₇K₉ 思わせる・よう₂₋₅ (をおもわせるような₁₋₁ を思わせるよ
うな₂₋₃ を想わせるような₁₋₁)

J F～ 2—2

J₁F₃K₁ というより・むしろ・近い₁₋₁ (というよりはむしろ・に
近い₁₋₁)

J₃F₁₂K₁ だって・あまり・変わらない₁₋₁ (だって・だって・あん
まり・と変わらない₁₋₁)

～ 49—4220

K₁ 近い₄₋₆ (に近い₃₋₃に近く₁₋₂のほうに近い₁₋₁)

～ J D 17—28

K₉J₃D₁ よう・も・思う₁₋₁ (ようにも思った₁₋₁)

よう・さえ・感じる₁₋₁ (ようにさえ感じる₁₋₁)

5) 比喩関連文献目録を作成した。

F 次 年 度 の 予 定

- 1) 結合比喩の分類・敷理を継続し終了する。
- 2) 文脈比喩の分類・整理を継続し終了する。
- 3) 報告書『比喩表現の分類』（仮題）を執筆する。なお、内容と構成に関しては、次のような案が用意されている。

I 比喩とはどんなものか

- 1 比喩の目的・方法・手段・条件・種類
- 2 比喩性の諸段階
- 3 比喩的転換の種類（実用文の場合）
- 4 比喩効果の分析（文学作品の imagery）
- 5 言語形式と対比関係（名詞対応のヨウの場合）
- 6 比喩の定義

II この研究のあらまし

- 1 目的
- 2 位置づけ
- 3 方法
- 4 資料（選定規準・用例出典一覧）

III 分類の手づつき

- 0 比喩システムの大分類
- 1 指標比喩の小分類
- 2 結合比喩の小分類
- 3 文脈比喩の小分類

IV 分類の結果

- 1―1 指標比喩分類一覧
- 1―2 比喩マーク分類一覧
- 1―3 比喩マーク別出現状況一覧
- 1―4 比喩マーク種別出現状況一覧
- 1―5 比喩マーク類別出現状況一覧

- 1—6 比喩マーク索引
- 1—7 比喩パターン索引
- 1—8 比喩形式索引
- 2—1 結合比喩分類一覧
- 2—2 前要素別主要結合表
- 2—3 結合比喩要素索引
- 3—1 文脈比喩分類一覧
- 3—2 文脈比喩要素索引
- V 各表の解説
 - 1 作り方
 - 2 読み方
 - 3 使い方
- VI 今後の課題
- VII 比喩関連文献目録

(中 村)

全国方言文法の対比研究

A 目的・意義

日本語の方言の文法を、相互に、また、標準語と比較できるかたちで、研究する。そのために、国立国語研究所地方研究員の協力を得て、沖縄をふくむ全国の方言について、統一的な方法による調査を行う。研究の重点を、方言の文法現象のうち、名詞、動詞、形容詞の形態論的構造の記述におく。

この研究の目的は方言の文法について、統一的な方法による全国的規模の調査を行うことによって、今後の、方言および標準語の文法の各種の研究に必要な基礎資料を得ることである。また、得られる資料は、方言地帯における標準語教育を改善するために役立つはずである。

なお、この研究は、地方言語研究室が昭和38年から行ってきた「各地方言の共通語との対照的研究」を引き継ぐものである。

B 担当者

話しことば研究室の上村幸雄（室長）、高田正治、林実知代の3名が担当した。今年度行った諸方言の録音とテキスト化は、次の人々の協力によるものである。

三浦松夫（秋田県大曲市大曲中学校教諭）、斎藤義七郎（日本大学高等学校講師）、宮良安彦（沖縄県立八重山高等学校教諭）

C 本年度の経過と今後の予定

本年度は次の仕事を行った。

- (1) 41年度から43年度までの調査結果の整理
- (2) 補足のための調査

41年度から43年度までの調査を補足するために、奄美、沖縄、八丈島に

において、文法の調査と録音資料の採集とを行った。

(3) 方言の録音とテキストの作成

話しことば研究室では、方言のほろびてゆくなかで、信頼できる、良質の研究資料を今後に確保するために、これまでも、方言の録音とテキスト化（音声表記、標準語訳、注つき）とを行ってきたが（『年報20』p. 8, 『年報21』p. 15, 『年報22』p. 9, 『年報23』p. 11参照）、48年度は前記の人々の協力によって、沖縄および東北地方の合計3地点において録音とテキスト化とを行った。

録音とテキスト化の仕事は44年度から45年度までの5年間に、各地の方言研究者の協力を得て合計50箇所以上の方言について行った。対象とした方言は国語史的にみて価値の高い僻地（奄美、八丈島など、また内陸部僻地）を主とする。また、その成果は順次、方言録音資料シリーズとして印刷していく予定である。

（上 村）

発音過程に関する研究

A 目的・意義

標記の研究は、話しことば研究室が継続的に行っている日本語音声の研究の一部をなすものである。研究は、現代日本語の音声の、音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴、指導法などを明らかにすることを目的として行う。おもに標準語の音声を分析の対象とするが、今後は比較の必要から、方言や外国語の音声、または、聴覚障害者、言語障害者の音声も対象とすることがありうる。

B 担当者

話しことば研究室の上村幸雄（室長）と高田正治が担当した。

C 本年度の研究

主として前年度から引き続いてX線像による調音運動の研究を続け、標準語の個々の単音を発する際のX線映画フィルム像の計測とトレース作業とを行った。また、音韻論の理論的な研究、発音指導の方法に関する研究もあわせ行なった。これらの研究の成果に関しては、次のような発表を行った。

上村幸雄・高田正治 「日本語の母音における下あごのうごき」

（国立国語研究所論集5）

有泉 均・高田正治 「X線映画による調音運動の分析——唇、舌、顎の協調関係——（口頭）」

（日本音響学会 音声研究委員会 資料番号S73—28 1974,

1.30 京都大学工学部）

上村幸雄 「フォネムの心理的側面について（口頭）」

（日本音響学会 音声委員会 1973, 5. 9 電子総合研究所）

上村幸雄 「話し手のフォネームの認識について（口頭）」

（東京都立大学 方言学会 1973. 9. 8 都立大学）

上村幸雄 「言語および言語指導における最近の傾向について（口頭）」

（音響学会 音声委員会 資料番号 S 73—46 1974. 2. 27

東北大学医学部）

一方、前年度に行った聾児の発音指導，言語指導の方法の改善に関するシンポジウムの記録『聾児の言語指導の方法について』上村幸雄・比企静雄編をまとめた。

また，これらの研究の成果に基づいて，発音指導の方法に関するシンポジウム（69ページ参照）を仙台で開催した。

D 今後の予定

49年度以後も，発音過程全般に関する研究，音韻論的な研究，発音指導についての研究を行う。なお，新装置によるデーターの再検討を行ったため，47年度中に予定していた成果の刊行は49年度にくりのばす結果になった。

（上 村）

図形および文字の知覚および認識機構の研究

A 目 的

図形および文字が、感覚伝送系での情報処理、および大脳における神経系の活動の結果として知覚あるいは認識される過程について、生理心理学および視覚心理学的立場から実験研究を行う。

B 担 当 者

話しことば研究室の神部尚武が担当した。

C 本年度の経過と今後の予定

本年度は、7年計画の第2年次として、文献上の調査のほか、眼球運動の測定装置、反応時間の測定装置などの、実験研究に必要な機器を整えた。

眼球電位法によって眼球運動を記録する装置がほぼ完成し、文字系列を種々の速度で提示する装置を製作中である。このほかに、指文字を材料として図形と音節間の対連合の学習過程を調べる実験が進行中である。

次年度は、さきにのべた装置を完成し、眼球運動、反応時間などを手がかりに、文字の認識に関する基礎的な実験を実施していく予定である。

(神 部)

語彙論上の諸問題に関する調査・研究

A 目 的

語の意味（広義）・語の文体性・語種・語構成など、語彙論上の諸問題の範囲内で、調査・研究を行うものである。具体的には、前年度に引き続いて、Cに記す同義語（同義的な類義語）についての調査を行った。

B 担 当 者

書きことば研究室の西尾寅弥が担当し、高木翠がその作業を助けた。

C 本年度の作業

「卓球／ピンポン」「つや／光沢」「さじ／スプーン」というような、かなり同義的な（用法のある）類義語の数十組について、どう違うと意識するか、ふつうどの語を使うか、どの語を好むかなどを、質問紙によって調査する。質問の一部分は、『類義語の研究』（報告28）に収めた昭和38年の調査と同一のものを用い、約10年をへだてた変化をみようとした。前年度は調査対象として老人層と青年層をとりあげ、東京と大阪において調べた。本年度は中年層についてやはり東京と大阪で調査を行い、結果を集計した。また、前年度分と合わせて、全体の集計・分析にとりかかった。

D 今後の予定

調査結果の集計・分析を継続・完了させ、他方同一の同義語についての実際の使用例の検討を行い、この双方に基づいて同義語についての記述を行う予定である。

（西 尾）

日本言語地図作成のための研究

一作図ならびに検証調査一

A 目 的

現代日本語の方言的基盤を地理的に展望し、かつ、日本語の歴史を言語地理学的に考察するために、日本語地域全域を対象とする『日本言語地図』全6集を作成する。あわせて、『日本言語地図』に盛られている資料の性格を明らかにするための、検証調査を行う。

B 担 当 者

第一研究部長の野元菊雄、地方言語研究室の徳川宗賢（室長）・本堂寛・佐藤亮一・高田誠が共同してあたり、白沢宏枝が協力した。また、非常勤職員W. A. グロータースほか、多くの人々の協力を受けた。

C 本年度の研究

昨年度までの経過については、刊行ずみの『日本言語地図』および『年報7（昭和30年度）』以下を見られたい。

『日本言語地図』第6集（最終巻）の刊行が行われた。

検証調査は、都合により、本年度は行わなかった。

D 今後の予定

地図の刊行が終わったので、日本言語地図作成のための調査に関して集められた資料や、日本言語地図編修の過程でできあがった資料を整理する。その一部、たとえば全見出し語索引などは機会を得て刊行したい。

検証調査については、昭和49・50年度にわたって継続し、結果を整理し、その期間中に刊行したい。

（徳 川）

所属集団の差異による言語行動の比較研究

A 目 的

人々の言語生活は性、年齢、階層などを始めとして、彼らがおかれている社会的文化的諸状況と密接な関係をもっている。この関係を明らかにするためにいくつかの調査研究を行っている。

この研究は題目としては本年度から始まったものであるが、事実上は昭和46、47年度に文部省学科研究費試験研究（1）（「社会変化と言語生活の変容」代表者 岩淵悦太郎）を受けて実施された研究の継続である。この二年間に山形県鶴岡市において共通語化の調査（概要は『年報23』参照）を、愛知県岡崎市において敬語使用の調査（概要は『年報24』参照）を行った。これらの調査はそれぞれ約20年前に国立国語研究所で行った同種の調査結果と比較対照し、この間の社会状況の変化が言語生活にどのような影響を及ぼしたかを明らかにしようとしたものである。逆にいえば人々の言語（生活）を変容させる条件がある程度明らかにできると思われる。

さしあたり、本年度は鶴岡市における共通語化の調査の分析を行い、報告書の作成に取り組む。あわせて、同地においていくつかの追加調査を実施する。

B 担 当 者

データの整理・集計には、野元菊雄（第一研究部長）・江川清（地方言語研究室）・堀江よし子（近代語研究室）が当たった。また、統計数理研究所の林知己夫・林文の協力を得た。

報告書の執筆は主として野元・江川が担当し、一部を東京大学新聞研究所の鈴木裕久が分担した。

追加調査は野元・江川が担当した。

C 本年度の研究

前年度までの二年間文部省科学研究費・試験研究(1)を受けて実施してきた調査の整理およびその分析を行った。とくに、昭和46年度に鶴岡市で実施した共通語化の調査結果を昭和25年度の調査結果(『国立国語研究所報告5』)とを比較検討することによって約20年間の時間の経過に伴う社会構造の変化が言語生活にどのように影響を及ぼしたかを明らかにしようと試みた。

データの集計には統計数理研究所の協力を得て、同所の電子計算機を用い、さらに数量化理論第Ⅲ類などの数学的手法を用いて解析を行った。

それらの結果は『LDP(所内資料)11, 12』, 『ことばの研究4』(論集4), 『電子計算機による国語研究VI』, 国立国語研究所研究発表会などで部分的に発表した。さらに『地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較—』(報告52)に全体をまとめて報告した。

追加調査としては次の2種の調査を行った。

一つは昭和25, 46両年度ともに被調査者であった者のうち、その間の言語の変容に典型的な傾向を示した者などを中心に事例調査を行った。

もう一つの調査は鶴岡市内の中学生約120名に行ったアクセント調査である。

D 今後の予定

鶴岡市の調査については、今年度に行った追加調査を整理するとともにさらに継続しアクセントの調査を行う。これらの結果と前記報告書の結果とをあわせて英文の報告書を刊行したいと考えている。

また、岡崎市での敬語使用に関する調査の分析を行う。

そのほか新たな角度からの言語生活の実態調査に取り組む予定である。

(江 川)

現代児童・生徒の言語能力の動態調査

A 目 的

現代の児童生徒は社会的文化的変化とのかかわりのなかで、どのような言語能力を獲得しているか、その実態・特徴・問題点を明らかにすることを目的とする。

B 担 当 者

国語教育研究室の村石昭三（室長）、根本今朝男が担当し、芦沢節（第二研究部長）が参画した。また、川又瑠璃子がこれを助けた。なお、非常勤職員岡本奎六（前期）の協力を得たほか、調査の実施に際して、別掲の協力学校、調査協力者、作文評価委員の協力を得た。

C これまでの作業

本調査は3か年計画の継続調査であり、昭和46年度より実施された。昭和46年度は文章表現力に関する基礎調査を実施し、昭和47年度は中学3年生の文章表現力に関する調査（東京、新潟、奈良の3都県、計18校、約700名）、同じく中学校3年生の表現行動の調査（計6校、各1クラスずつ）ならびに中学校の作文指導の実態に関する質問紙調査（東京23区、新潟、奈良の3都県、約400校）を実施した。

D 本年度の作業

本年度は最終年次調査にあたり、小学校6年児童を対象にした文章表現力に関する調査、表現行動の調査、作文指導に関する質問紙調査を実施した。また、中学校生徒を対象にした前年度の補充調査も実施した。

<小学校調査>

I. 文章表現力調査

絵図を含むテスト形式によって文章表現力を測定し、小学校6年生の文章表現力の水準と、文章表現のための能力構造とを明らかにする、いわば文章表現力の通時的動態調査である。

1) 文章表現力テスト、時間制限 約40分、集団テスト（東京、奈良、新潟 計18学校、約750名） 11月本調査実施

2) 妥当性検討のためのテスト ・知能テスト ・読書力テスト ・学力テスト・口頭文章化テスト ・言語能力テスト いずれも約80名について実施した。

3) 信頼性検討のためのテスト ・再テスト

なお、別に実験作文テストを実施し、実作文評価の妥当性・信頼性を検討した。

II 文章表現行動の調査

実作作文、アンケート調査、諸文字作品資料等によって、小学校6年生の文章表現行動（書く生活）を明らかにする、いわば表現行動の共時的動態調査である。

1) 実作作文 昭和48年5月～昭和49年3月にわたって6課題の実作作文を18学校について実施した。

課題名：・ともだち ・私の教室 ・私が聞いた音 ・最近の出来事についての私の意見 ・小さな時の私の思い出 ・〇〇先生（様、君）へ（手紙）

2) アンケート 昭和49年2月に、約700名の児童に対して、表現行動（書く生活）に関するアンケート調査を実施した。

3) 文字作品資料 事例研究的に特定児童またはグループを中心に、日記手紙、学級新聞等に関する文字作品資料を収集した。

III 作文指導の調査

東京都、新潟県、奈良県の小学校約300校を対象にして、小学校1年～6年の作文指導の実態をアンケートによって調査した。調査時期は昭和49年3月、回答者は各学年クラス担任者。

IV 協力学校、調査協力者

東京都

台東区立浅草小学校 真如数典 墨田区立両国小学校 柚木文夫
世田谷区立尾山台小学校 畠山 寿 杉並区立杉並第六小学校 藤岡澄子
葛飾区立中之台小学校 郡司初枝 江戸川区立小岩小学校 矢野兼夫

新潟県

新潟市立大畑小学校 山田勝衛 新潟市立栄小学校 黒井義隆
新潟市立笹口小学校 渡辺 久 西蒲原郡・鎧郷小学校 棚橋アイ子
中蒲原郡・大蒲原小学校 窪 正明 南蒲原郡 中之島小学校 石口輝隆

奈良県

奈良市立椿井小学校 岡田 博 奈良市立平城小学校 玉置寿幸
奈良市立青初小学校 田島克巳 吉野郡・竜門小学校 泉 嘉彦
吉野郡・賀名生小学校 辻井四朗 磯城郡・唐院小学校 上村文裕

なお、準備調査には次の2校の協力を得た。

東京都江東区立明治小学校・東京都台東区立育英小学校

作文評価委員

瀬川栄志 東京都教育庁指導部 中津留喜美男 東京都中央区立佃島
後藤昌吉 東京都台東区立育英小学校 小学校
菊野恒明 東京都江東区立明治小学校 久保庭健吉 東京都新宿区立津久戸
蛭田正朝 東京都東村山市立久米川小 小学校
学校
小竹省三 新潟県教育委員会指導課 深井義徳 新潟県教育センター
木村龍伍 新潟市立鏡沢小学校 中本泰弘 奈良県教育センター
杉本恭彦 奈良県教育委員会学校教育
課
郡 珖三 奈良市立飛鳥小学校

<中学校調査>

前年度に実施した中学校3年生の文章表現力を中心にした言語能力および

表現行動の補充調査を実施した。

I. 文章表現力に関する調査……各協力学校の（6校）1・2年生各1クラスずつ約500名について、前年度3年生に実施した同じテストを実施した。

II. 表現行動の調査

・課題作文調査 ・口頭文章化調査 ・作文学習に関するアンケート調査

III. 協力学校・調査協力者

東京都大田区立田園調布中学校 是恒英任

東京都葛飾区立堀切中学校 田中陽一 萩原克枝 福原訓

東京都豊島区立千川中学校 柴田文夫 水谷秀夫

東京都北区立岩淵中学校 大内武彦

新潟市立内野中学校 伊藤文男 小林ヒサ

新潟県三島郡・北辰中学校 小島 英

奈良市立若草中学校 中小路昭二

奈良山辺郡・都祁中学校 福井 弘

なお、表現行動調査の付帯調査として「作文の質を規定する諸要因」を明らかにするための実験作文テストを実施した。文題は第1文題 自己紹介の手紙、第2文題 学校のようにを紹介する手紙、第3文題 週休2日制について

E 今後の予定

昭和49年度は3か年にわたる調査で得た諸資料を整理分析し、昭和50年度に報告書にまとめる予定である。

（村 石）

就学前児童の言語能力に関する全国調査

A 目 的

現代の就学前児童（4歳児クラス，5歳児クラス）の言語能力の発達の実態を明らかにするため，昭和42年度より昭和44年度にかけて，本調査を実施してきたが，本年度は昨年度中止した文法・コミュニケーション能力調査の補充調査を行い，報告書のための原稿を作成する。

B 担 当 者

上記の研究題目は国語教育研究室の村石昭三（室長），天野 清（48.9.30転出）岩田純一（48.10.16採用）の共同研究であり，このうち，文法・コミュニケーション能力調査は天野清が担当し，川又瑠璃子が作業を助けた。

C これまでの作業

昭和42年度は就学前児童の文字力の調査，昭和43年度は就学前児童の語彙力調査，昭和44年度は就学前児童の語彙，文法，コミュニケーション能力調査を実施し，昭和45年度以後はそれらの検証・補充調査を行うとともに，データの集計整理の作業をすすめてきた。そして，昭和46年度に就学前児童の文字力の調査結果を『幼児の読み書き能力』（報告45）という報告書にまとめた。

D 本年度の作業

本年度は文法・コミュニケーション能力調査の補充調査を実施した。すなわち，1）構文の変換機能テスト及び接続詞の使用と文の結合テストを3歳児約50名を対象にして調査し，データを補充した。2）今まで実施したテストでの反応と話しことば能力との関係を明確にするための調査を4・5歳児

クラス計100名について実施した。これらに伴い、43年度以来の諸調査の集計を行い、考察を加えた。

D 今後の予定

昭和49年度に、『幼児の文法・コミュニケーション能力』（仮題）として、報告書を刊行する予定である。また、語彙力調査は昭和50年度に補充調査を実施し、報告書作成に着手する予定である。

（村 石）

言語の表現機能と伝達効果の研究

A 目 的

この研究は言語の表現機能や伝達効果を、言語そのものとの関連においてとらえようとしている。本年度は、「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」として、幼児の文表現が成立し、文形式が形成されていく過程で研究することを、前年度にひきつづいて目的としている。

B 担 当 者

言語効果研究室の高橋太郎（室長）と、大久保愛が担当し、鈴木美都代がこれに協力した。

C 本年度の作業

『幼児の文構造の発達』（昭和48年3月刊）でしのこした仕事、すなわち、「自由の場」での文構造の分析研究および、複文構造についての追調査を東京都千代田区立九段幼稚園でおこなうとともに、以前に採集した資料による単語の形態論的分析と連語論的分析を継続しておこなった。

D 今後の予定

来年度『幼児のことばの文法構造』（仮題）を刊行する予定である。

（高 橋）

明治時代語の研究

—明治初期における漢語の研究—

A 目的・意義

明治初期は、現代語の源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化に伴い、日本語は大きく変化した。中でも、語彙の変化がはげしく、それは漢語にもっとも著しく現れている。そこで、明治初期の各種文献に現れた漢語の実態を調査し、現在の漢語と比較対照する。さらに、大正期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語および漢字表記の変遷の条件と方向とを見きわめ現代語成立の歴史的背景を明らかにしようとする。

B 担当者

飛田良文（室長）、梶原滉太郎が共同して作業にあたり、中山典子がこれを助けた。なお、『安愚楽鍋用語索引』の作業には、斎賀秀夫（第三研究部長）が参加した。

C これまでの経過

近代語研究室では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行い、その成果については、そのつど年報または報告書に発表してきた（『年報』7～20および『明治初期の新聞の用語』＜報告15＞参照）。昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書8種の総索引を作成し、本年度には『安愚楽鍋用語索引』（資料集9）を刊行した（年報21～24参照）。現在、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との調査を行っている。

D 本年度の作業

本年度は、次の作業を行った。

- (1) 『花柳春話』の語彙表作成と三字漢語の分析
- (2) 丹羽純一郎訳『龍動新繁昌記』(明治11年)の用例カードの採集
- (3) 漢語研究のための著書・論文目録の作成
- (4) 近代語研究資料の調査
- (5) 『安愚楽鍋用語索引』の刊行
- (6) 「国立国語研究所蔵・明治期国語資料目録」の作成と印刷

その結果は、次のとおりである。

- (1) 『花柳春話』の語彙表作成と三字漢語の分析

本年度も前年度に引き続いて、語彙表作成の作業を継続し、ルビのない語の読み方を決める参考として、(2)の作業を行った。なお、三字漢語について、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との文体の比較を試みたので、その一部を報告する。

〔「一」を語頭に含む三字漢語〕

漢文直訳体の『欧州奇事花柳春話』と和文体の『通俗花柳春話』とを比較すると、「一」を語頭にもつ三字漢語は、異なり語数で前者が97語、後者が7語で、漢文直訳体の方が和文体より圧倒的に多い。

そこで、異なり語の「一」を除いた部分が、人間に関係のある語かどうかで分類すると次のようになる。()内は延べ語数

《欧州奇事花柳春話》

I 〔○+○○〕の語構成の場合

1. 人に関する三字漢語 44 語

＜イチ～＞ 44 一惡漢、一丐兒、一孩兒、一魁首、一佳耦、一華族、一下婢(2)、一鰥婦、一議員(2)、一貴族(2)、一愚漢、一豪傑、一豪雄、一才子(3)、一兒女、一士人、一秀才、一巡查、一小兒^ヱ、一少女(11)、一小兒^ニ、一少年(7)、一情郎、一女子(6)、一女兒(3)、一書生、一親友、

一賤夫，一騷人，一村婦，一男子，一男兒，一痴夫，一鄙女，一美女，一美人(3)，一鄙夫(2)，一婦人，一暴客，一密夫，一野夫，一老人，一老婆，一老夫(4)

<イツ〜> 0

2. 人以外の三字漢語 43 語

<イチ〜> 41 一会社，一雅地，一閑鏡，一奇事，一躑亭，一客舎，一巨屋，一國法，一社会，一小家(2)，一商家，一小魚，一小匣，一小冊，一小室，一小卓，一小池，一小馬，一責任，一拙文，一莊園，一草屋，一大屋，一大家，一大業，一大綱，一大国(2)，一大事，一大室，一大憂，一段落，一電光，一田舎，一都府，一美屋，一臂力，一富家(3)，一僻村，一茅屋(3)，一旅舎，一旅亭(2)

<イツ〜> 2 一巨屋，一世界

II [〇〇+〇] の語構成の場合

1. 人に関する三字漢語 0 語

2. 人以外の三字漢語 10 語

<イチ〜> 6 一時間(2)，一二日，一二里，一秒時(3)，一葉舟，一兩年

<イツ〜> 4 一室内(5)，一周間(2)，一週間(3)，一生涯

《通俗花柳春話》

I. [〇+〇〇] の語構成の場合

1. 人に関する三字漢語 1 語

<イチ〜> 1 一華族

<イツ〜> 0

2. 人以外の三字漢語 2 語

<イチ〜> 2 一大業，一大事

<イツ〜> 0

II. [〇〇+〇] の語構成の場合

1. 人に関する三字漢語 0 語

<イチ〜> 0

<イツ〜> 0

2. 人以外の三字漢語 4 語

<イチ〜> 3 一時間, 一二冊, 一二里

<イツ〜> 1 一週間

すなわち、『欧州奇事花柳春話』では、〔○+○○〕と〔○○+○〕とでは、前者が圧倒的に多く、〔○+○○〕では、人と人以外の三字漢語がほぼ同数であるのに、〔○○+○〕では、人に関する三字漢語がみえない。

『通俗花柳春話』は、用例が少ないが、〔○+○○〕と〔○○+○〕とがほぼ同数で、〔○○+○〕では、人に関する漢語がなく、「一二冊」「一二里」の冊や里のように助数詞と、「一時間」「一週間」の間のように、範囲を表わす接尾辞的漢語とがある。そして、「一」を切りはなすと意味をなさない。

そこで、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』とを比較すると、〔○○+○〕では、人に関する漢語のない点で共通しているが、〔○+○○〕の語構成では、文体による差が著しく、しかも、「一」を除いても独立する漢語である。ここに漢文直訳体の「一」を語頭にもつ三字漢語の特色がある。

そこで『欧州奇事花柳春話』の〔○+○○〕の語構成をもつ三字漢語が『通俗花柳春話』では、どのように表現されているか対比してみよう。
類型によって示すと次の通りである。

A [三字漢語——和語]

- { 近隣^{キンリン}ノ一下婢^{ケンレン}ニ眷戀シ (欧・2編134ページ)
近隣^{キンリン}の下婢^{はしため}に思^{おもひ}を懸^{かけ}て (通・2編138ページ)
僕^{センフ}今^{ツト}一賤^{タフ}夫^{タリ}勉^{メテ}貴^キカラ^ンヲ願^{ネガ}フ (欧・3編89ページ)
僕^{やつがれ}今^{いま}の賤^{いやし}けれども勉^{つとめ}て貴^{たか}から^んを願^{ねが}ひ (通・3編113ページ)

B [三字漢語——漢語]

- { 此時^{タルマ}車^{クルマ}ヲ客^客舎^{シャ}ノ門^{カド}前^{マデ}ニ停^{トド}ム (欧・2編85ページ)
此時^{このとき}車^{くるま}を客^{はたにや}舎^{おほ}と覺^{かど}しき門^{かど}に停^{とど}め (通・2編81ページ)

C [三字漢語——○○の○○]

- { 昨日ノテンプルトンモ今日ハ一華族 (欧・4編55ペ7)
 { きのふ 昨日のテンプルトンも ばけふ ひとり 早今日は一個の華族なり (通・4編72ペ7)
 { 今ヤ吾カ身一書生タルニ非ス (欧・1編15ペ4)
 { いま わがみ なみなみ しよせい おな 今ハ吾身も一般の書生と同じからざるに (通・1編21ペ1)

D〔三字漢語——連体修飾語＋被修飾語〕

- { 凡ソ三里ニシテ一雅地アリ (欧・3編80ペ3)
 { り あまり しづかなるところ 三里 餘いと幽隣地 あり (通・3編101ペ4)
 { 偶マー少女ニ救レ (欧・5編56ペ3)
 { いのち あやう ある おとめこ すくは 生命の危窮かりしを或少女に救れて (通・4編180ペ10)

E〔三字漢語——人名〕

- { ベンタドアハ一少年ト談話シ (欧・2編8ペ9)
 { ベンタドアのマルツラパースと語あひつゝ (通・1編121ペ3)

F〔三字漢語——ナシ〕

- { 一小児ヲ抱テ立ツヲ看ル (欧・2編118ペ8)

(2) 丹羽純一郎訳『龍動新繁昌記』(明治11年刊)のカード採集

昨年度の近代語研究資料の調査において、米沢市立米沢図書館(興譲館文庫)に、『龍動新繁昌記』の四編が発見されたので、四編のカード採集を行った。(未完了)

(3) 漢語研究のための著書目録の作成

前年度に引き続き、新しく気付いたものを補充した。

(4) 近代語研究資料の調査

本年度は、鹿児島大学付属図書館玉里文庫の洋学関係資料の調査(シヨメル『厚生新論』57巻・馬場貞由・宇田川玄真訳、『諸厄利亜語林大成』15巻・本木正栄等訳など)を行った。この調査では、養手重則氏(鹿児島大学教育学部教授)、伊牟田経久氏(同助教授)、楢松良雄氏(付属図書館事務長)、徳田寿氏(付属図書館運用係長)、田中辰雄氏(付属図書館管理係長)、大保ゆかり氏(同図書館)のお世話になった。

(5) 『安愚楽鍋用語索引』の刊行

用語索引刊行にあたっては、影印の底本を決定するため諸本の調査を行い
国立国会図書館本を底本とした。調査した諸本は、次の通りである。

1. 国立国会図書館蔵本 初編 二編上下 三編上下 (全揃)
2. 国立国語研究所明治文庫蔵本 初編
3. 国立国語研究所近代語研究室蔵本 二編上下
4. 東京都立日比谷図書館蔵本 初編
5. 東京都立日比谷図書館岡野文庫蔵本 二編上
6. 日本近代文学館蔵本 初編 二編上 三編上
7. 東北大学附属図書館狩野文庫蔵本 初編 二編上下 三編上下(全揃)
8. 京都大学附属図書館吉沢文庫蔵本 初編 二編上 三編上下
9. 京都大学文学部文学科閲覧室願原文庫蔵本 二編上下 三編上
10. 国学院大学附属図書館蔵本 初編 二編上下 三編上下 (全揃, とり
そろえ本)
11. 昭和女子大学近代文庫蔵本 初編 二編上下 三編上下 (全揃, とり
そろえ本)
12. 本間久雄氏所蔵本 初編 二編上下 三編上下 (全揃)
13. 広田栄太郎氏所蔵本 初編 (二種) 二編上下 三編上下 (全揃,
とりそろえ本)
14. 飛田良文蔵本 初編
15. 東京大学文学部国語研究室蔵本 (『滑稽残菜羹』11冊揃)
16. 山田忠雄氏所蔵本 (『滑稽残菜羹』のうち『安愚楽鍋』5冊)

諸本の調査に関しては、『安愚楽鍋』原本の閲覧を許可された各図書館、
および所蔵者に厚く御礼申し上げるとともに、原本の所在や、原本の書誌に
ついて御教示下さった下記の方々に、心から感謝の意を表する。

池上禎造氏 (大阪大学教授), 加藤彰彦氏 (実践女子大短期大学教授), 金
田弘氏 (国学院大学教授), 倉和男氏 (日本近代文学館), 見坊豪紀氏, 佐藤
喜代治氏 (東北大学教授), 竹内隆恭氏 (京都大学附属図書館), 橋本良治氏
(国立国会図書館), 畑有三氏 (共立女子大学助教授), 蜂谷清人氏 (共立女子

大学教授), 林巨樹氏(青山学院大学教授), 原田親貞氏(文部省主任教科書調査官), 東山陽光氏(国学院大学付属図書館), 広田栄太郎氏(大妻女子大学教授), 広庭基介氏(京都大学文学部文学科閲覧室), 古田東朔氏(東京大学教授), 本間久雄氏(早稲田大学名誉教授), 前田富祺氏(東北大学助教授), 前畑典弘氏(京都大学付属図書館), 松井利彦氏(京都教育大学助教授), 松村明氏(東京大学教授), 水川豊氏(国立国会図書館), 森岡健二氏(上智大学教授), 安田尚道氏(東京大学助手), 山田巖氏(駒沢大学教授), 山田忠雄氏, 山本正秀氏(専修大学教授), 吉田澄夫氏(武蔵野女子学院大学教授), 渡辺実氏(京都大学教授) <五十音順>

最後に国立国会図書館には, 原本の複製を許可され, 種々の御配慮をいただいたことに謝意を表したい。

(6) 国立国語研究所蔵・明治期国語資料目録の作成と印刷

本年度は, 国立国語研究所蔵の明治期国語資料のうち, 明治文庫および, 近代語研究室所蔵の明治期国語資料の目録を作成し印刷した。目録は五十音順とし, 著訳者名索引をつけた。

なお, 明治文庫目録にぬけている逐次刊行物については, 大浪由紀夫(国立国語研究所図書館)の協力により, 逐次刊行物明治期目録を作成し, 付載した。明治文庫目録の作成は, 飛田の指示により, おもに中山典子が担当した。

E 今後の予定

来年度は本年度の作業を継続し下記の作業を行う予定である。

- (1) 『欧州奇事花柳春話』ならびに『通俗花柳春話』の自立語索引の作成と分析
- (2) 漢語に関する著書・論文目録の作成
- (3) 近代語資料の文献調査
- (4) 明治期国語資料目録の作成

(飛 田)

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目的・意義

電子計算機を使って、日本語のデータを処理しようとする、ことばや文字を扱わせる上で、解決すべきさまざまな問題が生じてくる。たとえば、日本語の活用現象の処理や、漢字の処理などは、その例である。また、電子計算機の高速度と大量処理の能力を利用して、日本語の諸性格を研究すると、従来の研究方法では、とらえられなかった研究課題が浮かびあがってくる。文字連続や音素連続の研究、語句の相互連続の研究、あるいは、用語の自動検索に基づく語彙や文法、文体等の研究などは、その例であり、国語研究における電子計算機の利用価値は、今後、ますます、高まってくることが予想される。しかし、上記のような問題を解決したり、課題を研究したりするためには、多くの基礎的な調査と方法論の確立が、まず必要である。

この研究の当面の目的は、こうした問題を研究していくための、基礎的な研究資料を作成し、それに基づいて、日本語の電子計算機処理の基礎理論(アルゴリズム)を検討するところにある。したがって、その成果は、国語資料の機械処理に理論的根拠を与え、各種の言語情報処理の進展にも役立つものとなろう。

B 相当者

この研究は、第一資料研究室の田中章夫(室長、昭48. 7. 1より外国出張)・中野洋・靄岡昭夫が担当し、言語計量調査室の石綿敏雄(室長、昭48. 3. 27より外国出張)・斎藤秀紀・村木新次郎・米田正人の協力のもとに進められた。また、両研究室の堀江久美子・岡田敏子・竹内純子が研究作業を助けた。

C これまでの研究経過

電子計算機の導入以来、大量語彙調査の調査方式の検討・調査システムの開発のほか、「言語単位の自動分割」「言語データの機械処理法」「構文解析の自動化」「文字の連続確率（エントロピー）」「用語検索システムの開発」「言語情報処理のための言語分析」などの研究を行い、その成果は、『電子計算機による国語研究』（報告31）並びに、『電子計算機による国語研究Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』（報告34・39・46・49）に公表してきた。また、その途中経過や中間結果は、部内報告『LDP』に随時発表している。

以上のほか、昭和47年度には、文部省の科学研究費補助金（試験研究費）による「電子計算機による総合語彙表作成のための基礎的研究（研究代表者・岩淵悦太郎）」として、既製の用語索引12種および分類語彙表の入力データの作成を行い、近世の言語資料2作品（『浮世風呂』『心中天網島』）の文脈つき用語索引を作成した。

D 本年度の研究

前年度に引き続いて、用語検索システムの開発と、それに基づく各種の研究を行った。

まず、用語検索システムについては、プログラムのメインルーチンをほぼ完成した。出力プログラムとして、漢字ラインプリンタ用編集・出力プログラムを作成した。これは、今後、日本語の大量データの出力は漢字ラインプリンタによると思われるが、その点でも重要な実験である。本システムを用いて、森鷗外作品『寒山拾得』の漢字かなまじり文用語索引を作成した。

また、検索結果の分析、および、データを利用した実験を試みたものには、「日本語文の合成・解析」の研究で、「句のエントロピーに基づく構文合成」（田中章夫）「電子計算機による代表構文合成の試み」（竊岡昭夫）、「自動構文解析の構想」（中野洋）の研究がともに公表された。また、動詞の分析を中心に、「抽象的關係を意味する動詞の用法」「動詞を中心とした語彙の分

類」「自然現象を意味する動詞の用法」（以上、石綿敏雄）「動詞の結合価その1—辞書と覚え書き」（村木新次郎）が公表された。

「語構造の研究」には、「否定の接頭語『無・不・未・非』の用法」「三字漢語の構造」（以上野村雅昭）（第三資料研究室）が公表された。

「エントロピーの研究」には、「現代日本語における音素連続の実態」の品詞の分析が行われた（中野洋担当）。

以上のほか、新聞語彙調査の分析として、「新聞の見出しとリード文の構造について」（斎藤秀紀）があり、言語の新しい統計処理を目指す「文長と標本調査」（米田正人）がある。また、年年蓄積されるデータの管理についての研究に、「データ管理のこと」（土屋信一＜第三資料研究室＞）「言語データにおけるデータベースの考え」（中野洋）があり、今後、重要な問題となろう。

また、電子計算機の端末機器の開発により、新しい言語データ処理システムが可能になった。「漢字プリンターを使用したターンアラウンドシステム」（斎藤秀紀）の研究はその一つの例である。

これらの調査研究は、いずれも、1973年度中に公刊された『電子計算機による国語研究（VI）』（報告51）、『ことばの研究4』（論集4）および『ことばの研究』（論集5）に発表されたほか、経過報告・中間結果は、部内資料『LDP・12・13』に収められている。

E 今後の予定

用語語検索システムは一応の完成をみた。来年度はソーラスを用いた検索、文節単位、句単位、文単位での検索ができるように、システムを改良していく予定である。また、検索結果を用いて、語句や文の構造についての研究を進める。

また、来年度は新しい用語調査の発足に伴い、これまでの成果をふまえた新システムの開発研究が行われる。

（中 野）

漱石・鷗外の用語の研究

A 目的・意義

この研究は、電子計算機を使用した「索引作成と用語検索の処理システム」により、夏目漱石・森鷗外の用語を分析するものである。しかし、当面は言語情報（索引ファイル）の蓄積と、処理システムの改良・拡張とが中心となる。

B 担当者

この研究は、第一資料研究室の田中章夫（室長，48．7．1より外国出張）・中野洋・齋岡昭夫が担当し，言語計量調査室の石綿敏雄（室長，48．3．27より外国出張）・斎藤秀紀・村木新次郎・米田正人の協力のもとに進められた。また，両研究室の堀江久美子・岡田敏子・竹内純子がこの研究を助けた。

C これまでの研究経過

46年度までに開発された，KWICシステム（第一システム）を使用して，漱石の『三四郎』鷗外の『高瀬船』の索引作成のオペレートを実施し，索引ファイル（磁気テープ）を作成した。また，これらについては全文かたかなのKWIC索引を作成した。さらに，漱石の『硝子戸の中』『行人』のプレエディット（単位切り・読みがな付け）を終了，索引作成のオペレートを開始した。

一方，前年度には漢字かなまじりの索引作成システム（第二システム）が動き始め，鷗外の『雁』『山椒大夫』，漱石の『坊っちゃん』のプレエディット（単位切り・読みがな付け・付加情報付け）を終え，漢字テレタイプ入力を開始した。

D 本年度の研究

本年度は、前年度までに完成した、二つの索引作成システムの改良を進めながら、索引ファイル作成を進めた。

鷗外の『雁』『山椒大夫』、漱石の『坊っちゃん』の索引作成のオペレートを開始した。また、『雁』と、前年度に処理した『寒山拾得』の二作品に関しS単位KWIC索引を完成させ、昭和情報機器の漢字プリンターS5300を使用して出力した。また、漱石の『草枕』のプレエディットを終了し漢テレ入力を開始し、鷗外の長編小説『洪江抽斎』のプレエディットを開始した。これらは、いずれも第二システムを用いるものである。一方、第一システムを利用して、漱石の『硝子戸の中』『行人』のKWIC索引を完成させ、鷗外の『青年』のプレエディットと漢テレ入力を完了した。

なお、今年度末に電子計算機が、H—3010型から新型のH—8250型に入れかえられ、プログラムの変換、開発が行われた。

E 今後の予定

索引作成業務は今までに述べた11作品で予定を終了する。それ以後の索引作成に関しては現在検討中である。

索引作成システムに関しては、電子計算機による自動処理一貫システムを開発する。これは、現在手作業に頼っている「よみがな」「語種」「品詞」「活用」などの諸情報を全て電子計算機に行わせることである。また、将来においては単切りも自動処理で行うようにする。それにより漢テレ入力は原文だけにすることができるわけである。

(鶴 岡)

社会構造と言語の関係についての基礎的研究

A 目的・意義

言語あるいは言語生活は、社会生活およびそれを規定している社会構造と密接な関係を持っている。その関係を明らかにするための基礎的準備的研究を行おうとするものである。

比較的単純な構造を持つと思われる農村について、共通語生活と方言生活との交渉・接触の面を重視しつつ、言語およびその用法（の変動）と社会構造および社会生活（の変動）との関係を明らかにすることを目ざしている。

中心の調査地点としては福島県伊達郡保原町地区および福島市郊外の茂庭地区を選んだ。

B 担当者

飯豊毅一（室長、音韻・文法を中心に言語および言語使用の面）、渡辺友左（語彙および社会構造、ならびに両者の関連の面）が担当し、角田令子が作業を助けた。

C これまでの経過

昭和40年度に始めたこの調査は、昭和46年度までに次のようなことを行った。

- 1 言語および言語使用の調査
 - (1) 音韻・文法の方言体系の概略の調査と一部の語彙体系の調査
 - (2) 録音資料による実態調査
 - (3) 言語使用の意識に関する調査（面接調査およびアンケート調査）
 - (4) 各種場面における言語使用の変容についての調査
- 2 社会構造と言語使用の関係についての調査

(1) 社会構造の調査

(2) 社会構造と語彙およびその用法の構造との関連の調査

昭和47年度は、もっぱらこれらの調査の整理を行った。

D 本年度の作業

本年度は面接調査について、最終的な分析を進め、これをまとめて、国立国語研究所報告53『言語使用の変遷——福島県北部地域の調査一』（報告53）を刊行した。また昭和49年1月26日、国立国語研究所研究発表会（於岩波ホール）で、下記の題でその一部を報告した。飯豊毅一「地域社会と言語のうつりかわり」。

（飯 豊）

各地方言親族語彙の言語社会学的研究

A 目的・意義

次の目的のもとに、わが国各地方言の親族語彙の収集と記述的研究を進める。

- (1) 日本語の親族語彙に関する全国方言辞典または資料集を編集刊行する。
- (2) 方言親族語彙の全体的構造、個々の親族語の意味用法や親族呼称の構造等がどのような日本の特質をもっているかを明らかにする。あわせてそれらの言語的特質が親族組織を含む日本社会の特質とどのようにかかわり合っているかを明らかにする。

B 担当者

第二資料研究室の渡辺友左が担当した。

C 本年度の経過

この研究は、第二資料研究室が昭和40年度からとりくんできた研究課題「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」で渡辺が分担した課題の一部を発展させたものである。4年計画で、本年度はその初年度にあたる。

本年度の研究は、次の二つを平行して実施した。

- (1) 臨地調査——東北・関東・甲信・北陸・東海・近畿・中国・四国・九州・沖縄の10ブロックについて、4年間に、各1～2地点、全体で15地点程度の臨地調査をすることを目標に、本年度は次の2地点の調査をした。

島根県隠岐郡西ノ島町 千葉県長生郡一宮町

- (2) 文献調査——全国各地の方言集・方言辞典・民俗誌・村落調査報告書その他の文献から方言の親族語とその意味用法に関する記述の部分をカードに逐一転写採集した。約3千枚。「社会構造と言語の関係についての基礎的

研究」で昭和46・47年度に収集したカード約1万4千枚と合わせて、その分類整理にあたった。

D 今後の予定

臨地調査および文献調査は、次年度以降も継続して実施していく予定である。

(渡 辺)

現代語の表記法に関する研究

——新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究——

A 目的・意義

国語の正書法を確立する上に役立つ基礎資料を得るために、国語の文字・表記法に関する諸問題を調査・研究する。

B 担当者

調査研究の担当者は、土屋信一（室長）・野村雅昭であり、宮田信子（49. 2. 5退職）・武田道子・白木千夏が作業を助けた。

C これまでの経過

これは、第一資料研究室と言語計量調査室が進めてきた電子計算機による新聞の語彙調査によって作成されたデータに、機械および人手による処理を施し、各種漢字表、語表記表を作成し、その分析、記述を行うものである。研究は漢字と表記の二面から進めており、前者は野村が、後者は土屋が分担している。漢字に関する研究では、これまでに全体の3分の1のデータ量に当たる「1紙1年分」の層別漢字表と、1紙朝刊前半分長単位用語例表とを作成し、前者をもとに、中間集計の結果を、『現代新聞の漢字調査（中間報告）』（資料集8）として刊行した。さらに、3紙1年分の全データから用語例台帳を作成し、それを短単位に分割し、語種の判定、読みがなつけなどを行ったのちカード化し、五十音順に配列し、漢字表記語台帳を作成した。また、表記に関する研究は、短単位語表記一覧表の作成を目ざし、長単位データおよび原文データを整えた段階で中断し、もう一方で進めていた長単位データから、かな表記語一覧表を作成することに主力を注ぐことにした。これは、漢字に関する研究の漢字表記語台帳と対をなすものである。

また、これまでの分析の結果や調査の進め方について、『電子計算機による国語研究Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』（報告34・39・46・49）『国研LDP』などに発表した。

D 本年度の作業

1 漢字に関する研究

(1) 漢字表台帳の作成

前年度に作成した、漢字表記語台帳をもとに、漢字表台帳を作成するための作業を行った。漢字表台帳とは、データに出現した単位語の表記要素となっている、おのおのの漢字について、各種の情報を記入したカードを作成し、それを分類・整理して、各漢字ごとに、音訓・用法別に用語例・表記形、層別度数などを記入したものである。この台帳をもとに、漢字に関するデータを計算機に入力し、処理することによって、各種の漢字表の作成が可能になる。

本年度に行った、漢字表台帳作成のための作業の内容は、以下のとおりである。

- (i) 漢字表記語台帳から、表記語形中の各漢字ごとに、それを見出しとした漢字カードを作成する。(終了)
- (ii) 漢字カードに、音訓・用法・排列コードなどの情報を記入する。(終了)
- (iii) 漢字カードを、排列コードほかの情報によって、分類・整理する。(終了)
- (iv) 一定の順序に排列された漢字カードの内容を、台帳に転記する。(継続)

上記(ii)のうち、用法に関する情報とは、次のようなものである。

- 語の種別に関するもの…人名・地名・数詞など
- 語の構成に関するもの…自立形・結合形・接辞など
- 語の表記に関するもの…借字・熟字訓など

以上の作業によって、データ全体に出現した漢字の字数は、異なりで、約

3200, 延べで, 約100万と推定される。

(2) 新聞使用漢字の分析

漢字によって表記される言語単位が, 新聞に出現した単位語の中で, どのような順序で結合しているか, また, その結合にはどのような意味的關係が見られるかということを調べるために, 本年度は, 三字漢語を抽出して, その分析を行った。その方法としては, 三字漢語を二字漢語(主語基)と一字漢語(副語基)に分け, それぞれの構文上の形態, 性質によって分類し, その結合パターン・結合関係について記述した。その詳細については, 下記の論文に発表した。

野村雅昭「三字漢語の構造」(『電子計算機による国語研究VI』<報告51>所収)

2 表記に関する研究

表記に関する研究は, 主として語表記の研究に目標を置いている。そのためには短単位語表記一覧表を作成する必要がある。当初は短単位語彙表に長単位の用例および典拠・層別情報を付加したものを電子計算機によって作成・印字する計画であったが, 年度内に短単位表が作成される見通しがないため, この方式は中断した。(今後, 短単位表が作成されてから作業が進められるように, 必要なデータはH—8250計算機用テープにコード・コンバートをして保存した。)代わって, これまで並行して作成していた, 長単位かな表記語台帳の長単位データに手を加えて, 短単位かな表記語一覧表を作成することにした。作業は, 漢字の全体用語例台帳から漢字を含んだかな表記語を取り出して, 調査単位を整え, 同表記異語の判別をし, カード化する作業と, 語彙調査の3紙1年分の長単位データ・ファイルから, 漢字を含まない長単位かな表記語を取り出して, かな表記語用例台帳を作成し, それに手を加えてカード化する作業, さらにそれらをまとめて一覧表を作成する作業よりなっている。本年度は, 漢字を含むかな表記語のカード化は終了し, かな表記語用例台帳の作成・印字を終え, 単位切り・同表記異語の判別の中間段階まで到達した。この作業に際して, 前年度に作成した, 任意の長単位語を文脈付きで漢字テラタイプで打ち出すKWICシステムを利用し, 延べ約一

万語の長単位語につき文脈付きの用例を印字し、同表記異語の判別に役立てた。

E 今 後 の 予 定

1 漢字に関する研究

漢字表台帳を完成し、それをもとに、漢字についての入力データを作成し、電子計算機に入力する。そして、それを処理して、数種の度数表を出力する。さらに、それらをもとに作表・分析・執筆を行い、報告書用原稿を作成する。

2 表記に関する研究

49年度は、かな表記語一覧表を完成させ、引き続き、かたかな書き語・ひらがな書き語・まぜ書き語などの記述と分析に進む予定である。

(土屋)

電子計算機による語彙調査

——新聞を資料とする——

A 目 的

現代語の語彙の実態調査を、カードによる人為作業から、電子計算機による機械処理に移して、データの処理量をふやし、語彙調査を、今日的課題の調査研究として実あらしめようとする。現代の新聞から、300万語の標本を取り語彙の実態を明らかにする。

B 担 当 者

言語計量調査室の石綿敏雄（室長よ48, 3, 27より外国出張）、斎藤秀紀、村木新次郎、米田正人および第一資料研究室の田中章夫（室長, 48, 7, 1より外国出張）・中野洋・齋岡昭夫がこれに当たり、両研究室の堀江久美子・小高京子・沢村都喜江・下山いくよ・竹内純子・岡田敏子が研究作業を助けた。

C これまでの経過

昭和41年1月から12月までの新聞3紙（朝日、毎日、読売）1年分を対象とする語彙調査で、昭和41年より調査を開始した。調査の単位には、長単位と短単位の2種類を採用した。

昭和44年度に全体の三分の一に当たる量についての語彙表を刊行45, 46年度にも、同じデータから作成した別種の語彙表を刊行した。昭和47年度には全標本についての全語彙を含む（19万語の）語彙表を刊行した。

D 本年度の研究作業

新聞用語について次のような分析を行った。

1. 一部分について同語異語の判別を行う。

2. 音素連続の品詞別の分析

3. 動詞用法の記述

なお、新聞用語調査は、本年度をもって一応完了とする。

(石綿)

国語および国語問題に関する情報の収集・整理

国語に関する学問の研究成果一般を知り、あわせて関係学界の動向や言語および言語生活に関する世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和48年1月から12月までに刊行された図書・雑誌・新聞について、その期間内に発表された文献の調査を行った。これらの文献の目録は、その他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和49年版）に掲載されている。

以下、文献を内容によつて分類したうえ、冊数または点数を示し、大まかな傾向を知る手がかりとする。（ ）内に前年の数を示し、今年の状況と比較できるようにした。

なお、外国発行の刊行図書・雑誌については、その採録範囲を日本語の研究および日本語教育に関するものに限定した。

以上の調査および国語年鑑編集の作業は、次のものが担当した。

伊藤菊子 田原圭子 中曾根仁

1 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・判型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、『納本週報』（国立国会図書館）、その他の目録から情報を補い、総数722冊についての分類目録を作成した。

刊行書の分類とその冊数

国語（学）	50（24）	文字・表記	16（7）
国語史	42（31）	語彙・用語	
音声・音韻	6（6）	語彙・用語	24（10）
		人名・地名	3（4）

文 法	21 (9)
文章・文体	6 (2)
方言・民俗	83 (67)
ことばと機械	5 (4)
コミュニケーション	
コミュニケーション一般 (音 語生活)	21 (21)
言語技術 (話し方・書き方)	20 (14)
マス・コミュニケーション	6 (8)
国 語 問 題	5 (2)
国 語 教 育	
国語教育一般	8 (5)
学習指導	10 (18)
ことばの指導	0 (0)
文字教育	3 (0)
語彙・文法教育	4 (0)
聞く・話す	0 (0)
読む・読書指導	14 (12)
書く・作文指導	10 (6)
文学教育	2 (0)
古典教育	0 (3)
漢文教育	0 (1)
特殊教育	6 (2)
学力調査	2 (6)
国語教科書・その他	10 (4)
幼児の言語発達	8 (8)
日本語の研究と教育	9 (9)

言語学その他	46 (80)
辞典・用語集	
辞典・用語集一般	1 (0)
国語辞典	7 (7)
用語辞典・用語集	24 (32)
特殊辞典	14 (15)
索引	18 (19)
資 料	
資料	16 (48)
史料	17 (25)
解題・目録	16 (22)
年鑑	11 (11)
計	564 (542) 冊

追 補	
国語学その他	10 (8)
国語史	6 (12)
音声・音韻	2 (0)
文字・表記	5 (2)
語彙・文法	4 (5)
文章・文体	3 (1)
方言・民俗	48 (38)
ことばと機械	1 (2)
コミュニケーション	10 (2)
マス・コミュニケーション	1 (2)
国語問題	1 (0)
国語教育	16 (12)
日本語の研究と教育	12 (13)
言語学その他	19 (6)
辞典・索引・資料	20(100)
総計	722 (745) 冊

Ⅱ 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・巻号数・発行年月およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては『雑誌記事索引』（国立国会図書館）の人文・社会編，『LLBA』（Language and Language Behavior Abstracts），その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は，2,924点に達した。（連載物については，各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた。）

1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数（目録から採録した分は含まない。）

a 一般刊行雑誌（学会誌を含む）……350（351）種

国語・国文・言語ほか	133（122）	週刊誌・総合誌	1（1）
方言・民俗	15（14）	文芸・詩歌・芸能	6（5）
国語問題	9（5）	その他（教育・社会学・心理学ほか）	73（80）
国語教育	23（27）	臨時に入った雑誌	15（21）
日本語教育	3（2）	外国誌	50（49）
マス・コミ関係	12（12）		
外国語	10（13）		

b 大学・研究所等の紀要・報告類……256（253）種

2 論文・記事の分類とその点数

国 語（学）		音声・音韻一般	43（18）
国語（学）一般	145（219）	史的研究	22（35）
時評・随筆	78（63）	アクセント・イントネーション	13（7）
国 語 史		文字・表記	
国語史一般	56（34）	文字・表記一般	0（1）
訓点資料関係	10（5）	文字・字体	18（7）
音声・音韻		表記	24（29）

語彙・用語

語彙・用語一般	116(50)
古語	36 (41)
現代語	24 (18)
新語・流行語	2 (2)
外来語	4 (2)
人名・地名(命名)	13 (18)
辞書・索引	26 (34)

文 法

文法上の諸問題(現代語法)	53 (44)
史的研究	44 (32)
敬語法	9 (26)

文章・文体

文章・表現一般	35 (32)
史的研究	43 (49)

古典の注釈

注釈一般	2 (6)
上古	6 (16)
中古	17 (9)
中世	4 (5)
近世以降	9 (12)

方言・民俗

方言一般	38 (19)
各地の方言	
東部	54 (20)
西部	25 (19)
九州・沖縄	31 (24)
民俗	4 (13)

ことばと機械

言語情報処理	20 (43)
研究用機器	3 (19)

コミュニケーション

コミュニケーション一般	69 (31)
言語生活	71 (81)
言語活動	
言語活動一般	0 (11)
書く・読む	38 (19)
話す・聞く	10 (3)

マス・コミュニケーション

一般的問題	6 (7)
新聞	9 (9)
放送	52 (50)
広告・宣伝	9 (1)
印刷・出版	22 (0)

国語問題

国語問題一般	64(102)
<うち、音訓・送りがな改定 に関する意見等 13(37)>	
表記法	19 (20)

国語教育

国語教育一般	127 (92)
国語教育史	9 (10)
学習指導	45 (44)
ことばの指導	20 (18)
文字・表記教育	19 (42)
語彙教育	10 (1)
文法教育	18 (11)
聞く・話す	21 (2)
読む・書く	
読む・書く一般	13 (12)
読解指導	21 (50)
読書指導	39 (46)
作文指導	59 (60)
文学教育	18 (4)
古典教育	12 (3)

漢文教育	9 (19)
特殊教育	17 (17)
学力評価	2 (7)
国語教科書・教材研究	44 (50)
幼児の言語発達	30 (20)
日本語の研究と教育	93 (74)

言語(学)

言語一般	134(171)
意味	4 (6)
比較研究	14 (14)
翻訳の問題	48 (20)
外国語研究	9 (7)
外国語教育(学習)	34 (24)
各国の言語問題(教育)	26 (23)
言語障害研究	38 (18)

資料

資料一般	6 (7)
国語資料	12 (17)
翻刻	25 (24)
目録	10 (6)

書評・紹介

国語(学)その他	18 (18)
音声・音韻	3 (9)
文字・表記	0 (3)
語彙・用語	20 (13)
文法	9 (9)
文章・文体	1 (2)
方言・民俗	6 (3)

ことばと機械	1 (3)
コミュニケーション	1 (6)
マス・コミュニケーション	0 (1)
国語問題	2 (1)
国語教育	14 (19)
日本語の研究と教育	6 (2)
言語(学)その他	34 (32)

計 2,497 (2,345) 点

追 補

国語(学)その他	36 (54)
国語史	24 (15)
音声・音韻	12 (21)
文字・表記	15 (8)
語彙・用語	36 (38)
文法	29 (37)
文章・文体	14 (38)
古典の注釈	5 (20)
方言・民俗	63 (29)
ことばと機械	2 (1)
コミュニケーション	11 (8)
マス・コミュニケーション	1 (0)
国語問題	4 (8)
国語教育	29 (68)
日本語の研究と教育	1 (6)
言語(学)その他	118 (95)
資料	9 (14)
書評・紹介	18 (10)

総計 2,924 (2,815) 点

Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き点数は1,867点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		西日本	111 (127)
朝日	213 (299)	週刊・その他	
毎日	160 (324)	日本読書新聞	30 (28)
読売	158 (464)	週刊読書人	55 (48)
(大阪)*	(1) (2)	図書新聞	34 (49)
東京	117 (259)	新聞協会報	61 (49)
サンケイ	116 (481)	教育学術新聞	13 (14)
日本経済	83 (147)	その他	48 (41)
北海道	110 (107)	計 1,867 (2,442) 点	

* (大阪) は、大阪版であって、山田房一氏から送られたものである。

2 月別の切り抜き点数

1月 151 (220)	2月 137 (208)	3月 165 (211)
4月 191 (214)	5月 177 (278)	6月 221 (176)
7月 123 (214)	8月 157 (199)	9月 125 (173)
10月 184 (177)	11月 111 (257)	12月 125 (115)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	178 (186)	人名・地名	28 (298)
音声・音韻	17 (28)	文 法	0 (6)
文 字		文 体	
文字・表記	16 (24)	文体・表現	41 (23)
活字	12 (6)	方 言	
語 彙		方言一般	27 (31)
語彙一般	39 (53)	方言と標準語	7 (5)
各種用語	20 (42)	各地の方言	22 (21)
新語・流行語・隠語	60 (35)	言 語 生 活	
外国語・外来語	29 (31)	言語生活一般	64 (81)
辞書	40 (46)	ことばの問題	24 (54)
問題語・命名	69 (42)	ことばづかいの問題	20 (9)

敬語の問題	25 (34)	読む(読書指導)	12 (28)
言語活動		書く(作文指導)	18 (6)
言語活動一般	11 (9)	文学・古典教育	2 (3)
話すこと(聞くこと)	28 (38)	特殊教育	28 (22)
書くこと(読むこと)	17 (20)	視聴覚教育	9 (10)
読書	37 (29)	学力テスト	2 (6)
ことばと機械	23 (25)	幼児語教育	23 (20)
国語問題		言語学	
国語問題一般	55 (72)	言語一般	58 (74)
表記の問題		外国語一般	32 (38)
表記一般	35 (34)	比較研究	25 (30)
当用漢字など	51 (45)	翻訳の問題	36 (70)
かなづかい	3 (10)	外国語教育	60 (74)
送りがな	22 (48)	外国語に関する紹介ほか	39 (30)
かな書き	8 (1)	日本語の研究と教育	68 (113)
横書き・縦書き	2 (3)	マス・コミュニケーション	
人名・地名の表記	23 (18)	マス・コミ一般	44 (38)
外来語表記	8 (10)	新聞	16 (17)
ローマ字	1 (2)	放送	32 (44)
国語教育		宣伝・広告	45 (104)
国語教育一般	43 (74)	出版	58 (50)
学習指導の問題		書評・紹介 ほか	148 (162)
学習指導一般	2 (8)		
話す(聞く)	5 (2)		
		計	1,867 (2,442) 点

切り抜き点数は昨年よりも570点あまり少なかった(くわしくは『国語年鑑』<49年版>に掲載)。これは、ことばに関する連載記事が例年に比して少なかったことが一因である。その一例を分類項目別の「人名・地名」にみることができる。昨年は298点だったのが今年は28点と大幅に減少している。昨年は9月末まで『サンケイ』に東京の地名に関する記事が連載されていたためである。その他、分類項目別では、きわだった特徴はみられなかったが、しいてあげるとすれば、出版関係で、「文庫本ブーム」の指摘と用紙不足によ

る不況ムードのことであろう。

月別の点数で6月の記事がきわだつて多いのは、「当用漢字音訓表」と「送り仮名の付け方」が改定され、6月18日に内閣告示として示され、その関連記事が各紙に掲載されたことによる。

〔付〕 所外からの質問について

昭和48年度に電話で受けた質問件数を示すと次のとおりである。

計 \ 月	48年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	49年 1月	2月	3月	
	769	50	71	88	71	87	67	111	76	49	70	71	58

（前年度の質問数は732件であった）

質問の内容は、例年どおり多方面にわたっていたが、件数の多かったものを示すと次のとおりである。

用字用語について217件（用語一般72件、用字一般58件、同音語43件、類義語15件）あり、例年どおり一番件数が多かった。同音語の中では、異状・異常、実情・実状、作製・作成の使い分けに關してなどがめだっていた。

漢字の読み132件（姓名に關して39件、重複＜ちようふく・じゅうふく＞、施行＜せこう・しこう＞のように両様の読みかたがあるものについて17件などを含んでいる）。字体に關して56件、（吉・吉、ゑ・えなど）、送りがな49件、かなづかい36件（うち10件は＜こんにちは＞に關して）、敬語の使いかた29件、国語政策に關して25件。そのほか、研究所および研究所の刊行物についての照会が56件あつた。電話の質問のほかには、はがき・封書による質問が18通（海外からの1通を含む）、直接来所しての質問が10件ほどあつた。

以上の質問件数は、すべて質問の係を通つたもので、所員が直接個人的に受けた質問は含んでいない。

（田原，中曾根）

科学研究費補助金による研究

電子計算機による総合語彙表作成のための基礎的研究（代表 岩淵悦太郎）

（一般研究B）

＜研究目的＞

- 1 過去から現在に至る日本語の語誌がたどれるようにするための基礎作業として、代表的な古典作品における単語の使用度数を記載した総合語彙表の磁気テープ台帳を、電子計算機によって作成する。
- 2 上記の総合語彙表の資料にした古典作品のいくつかについては、文脈付きの用語索引を電子計算機によって作成し、印字する。
- 3 異なり約5000の漢字について総合漢字表台帳を作り、磁気テープに収める。

＜実施の概要＞

- 1 前年度に引き続き、『万葉集』・『竹取物語』・『枕草子』・『源氏物語』など既成の用語索引12種を収集し、まとめて、紙テープにパンチした。また、これと並行して、前年パンチした「分類語彙表」の紙テープの校正・再パンチを行った。人件費等の高騰から、後者は作業を終了したが、前者は一部を残した。
- 2 これまでに用語索引の作られていない文献の中から、『浮世床』『今昔物語集巻26』『同巻30』を取り上げ、約九万語のかたかな文脈付き用語総索引を作成・印字した。前年度作成した『浮世風呂』『心中天網島』の用語総索引と合わせて、古代末期から近世にわたる約十八万語の言語資料を磁気テープに収め、用語索引として印字することができた。
- 3 総合漢字表については、国立国語研究所でこれまで進めてきた用字用語調査の漢字表の整理と統一を進めた。

図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和48年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

図 書

受 入……………2,569冊

	購入	寄贈	製本雑誌	その他	計
和 書	1,505	255	286	36	2,082
洋 書	414	10	63	0	487
計	1,919	265	349	36	2,569

逐次刊行物（學術雑誌，紀要，年報類）

継続受入……………601種

	購 入	寄 贈	計
和	54※	491	545
洋	38	18	56
計	92	509	601

※新聞（8種）を含む

（大塚）

庶務報告

I 庁舎および経費

1 庁舎

所 在	東京都北区西が丘 3 丁目 9 番14号		
敷 地			10, 030m ²
建 物			
本 館	鉄筋コンクリート二階建	(延)	1, 576m ²
図書館	鉄筋コンクリート平屋建書庫積層	(延)	213m ²
電子計算機室	鉄筋コンクリート平屋建		118m ²
(昭和49年3月31日まで)			
その他付属建物		(延)	570m ²
研究棟	鉄筋コンクリート三階建	(延)	3, 015m ²
研究室			872m ²
電子計算機室			339m ²
実験室			384m ²
機械室			96m ²
その他付属建物			1, 324m ²
計			5, 492m ²

2 経 費

昭和48年度予算額	255, 083, 000円
人件費	160, 780, 000円
事業費	93, 415, 000円
各所修繕	888, 000円
昭和48年度文部省科学研究費補助金総額	
一般研究費 (B)	2, 000, 000円

"	(C)	500,000円
"	(D)	260,000円

Ⅱ 評議員会（昭和49年3月31日現在）

会 長 有光 次郎 副会長（ ）
 （昭和49年3月14日就任）

石井 庄司	石井 良助
岩村 忍	江尻 進
遠藤 嘉基	小川 芳男
尾高 邦雄	小野 吉郎
佐伯 梅友	沢田 慶輔
田中千禾夫	千葉雄次郎
徳永 康元	中村 光夫
永井 健三	西尾 実
福島慎太郎	久松 潜一
頼 惟勤	

Ⅲ 組織と職員

1 定 員 74名

2 組織および職員（昭和49年3月31日現在）

	職 員	氏 名	備 考
国立国語研究所	所 長	岩淵悦太郎	
庶 務 部	部 長	井上 繁	48. 4. 1国立民族学研究資料館に転出
	部 長	荻原 湜	48. 4. 1国立教育研究所から転入
庶 務 課	課 長	酒井 睦夫	
	課長補佐	国井 和朗	
		菊地 貞	
		岡本 まち	

会 計 課	課 長 課長補佐	荒川佐代子	
		田島 正幸	
		幸 文雄	
		山本 昌志	
		金田 とよ	
		中村 佐仲	
		加藤 雅子	
		南 弘一	
		岩田 茂男	
		鈴木 亨	
		安藤信太郎	
		木村 権治	
		浅香 忠雄	
		大塚 通子	
		大浪由紀夫	
第一研究部	部 長	野元 菊雄	
話しことば研究室	室 長	上村 幸雄	
		中村 明	
		高田 正治	
		神部 尚武	
書きことば研究室	室 長	林 実知代	48. 4. 1第一資料研究室から配置換
		西尾 寅弥	
		宮島 達夫	47. 4. 3～49. 3. 31外国出張(西ドイツ)
		高木 翠	
地方言語研究室	室 長	徳川 宗賢	
		本堂 寛	
		佐藤 亮一	
		高田 誠	
		江川 清	48. 4. 1第一資料研究室から配置換

第二研究部 国語教育研究室	非常勤	白沢 宏枝 W. A. グローターズ	49. 1. 31任期满了
	部長	芦沢 節	
	室長	村石 昭三 根本今朝男	
		天野 清	{ 47. 9. 14~48. 7. 17外国出張(ソ連) 48. 9. 1九州大学に転出
		岩田 純一	48. 10. 16採用
		川又瑠璃子	
言語効果研究室	非常勤	岡本 奎六	48. 10. 31任期满了
	室長	高橋 太郎 大久保 愛 鈴木美都代	
第三研究部 近代語研究室	部長	斎賀 秀夫	
	室長	飛田 良文 梶原滉太郎 田原 圭子 中曾根 仁 伊藤 菊子 中山 典子 堀江よし子	48. 4. 1採用
第四研究部	部長	林 四郎	{ 48. 3. 27~49. 3. 31 言語計量調査室長事務代理 48. 7. 1~50. 6. 30 第一資料研究室長事務代理
第一資料研究室	室長	田中 章夫 中野 洋 霸岡 昭夫	48. 7. 1~50. 6. 30外国出張(オーストラ リヤ)
第二資料研究室	室長	岡田 敏子	48. 4. 1言語計量調査室より配置換
		飯豊 毅一	
		渡辺 友左 角田 令子	

第三資料研究室	室 長	土屋 信一	
		野村 雅昭	
		宮田 信子	49. 2. 5退職
		武田 道子	
		白木 千夏	48. 4. 1採用
言語計量調査室	室 長	石綿 敏雄	48. 3. 27～49. 3. 31外国出張(フランス)
		斎藤 秀紀	
		村木新次郎	
		米田 正人	48. 4. 1(非)48. 7. 1採用
		堀江久美子	
		小高 京子	
		沢村都喜江	
		下山いくよ	
		竹内 純子	48. 4. 1採用

(非)は非常勤職員

Ⅳ 研究発表会・研究報告会・研究集会

1 研究発表会「地域社会と言語」(来会者約150名)

日時 昭和49年1月26日(土) 午後1時30分～4時30分

場所 岩波ホール

あいさつ	所長	岩淵悦太郎
地域社会と言語のうつりかわり	第二資料研究室長	飯豊 毅一
言語データの新しい分析法	地方言語研究室員	江川 清
同一地点の継続研究	第一研究部長	野元 菊雄
質疑応答 司会	第四研究部長	林 四郎

2 研究報告会「鶴岡市における言語調査」(来会者約100名)

日時 昭和49年2月7日(土) 午後1時30分～4時

場所 鶴岡市青年センター

あいさつ	鶴岡市教育長	富樫 茂八
------	--------	-------

調査の概要	第一研究部長	野元 菊雄
20年間にどう変ったか	地方言語研究室員	江川 清
方言と共通語教育	第四研究部長	林 四郎

3 シンポジウム「発音指導の方法について」(出席者55名)

日時 昭和49年2月27日(水) 午後1時～5時

場所 東北大学医学部良陵会館

座長 上村 幸雄(国立国語研究所)

発表 ろう児の段階的な発音発語指導の概略 菊地勝(愛媛県立松山
ろう学校)

口蓋裂児の段階指導について 山村 衛(宮城県仙台市立長町
小学校)

方言地帯における音声と文字の指導 駒木勝一(秋田県雄勝郡
三梨小学校)

英語の発音指導における問題点 渡辺慎晤(宮城教育大学)

V 外国人研究員および内地留学生の受入れ

1 外国人研究員

氏名・職員	研究題目	研究期間
スタファン・ヤンソン	電子計算機による日本語文	昭和48年10月1日から
ストックホルム大学 生(スウェーデン)	型の研究	昭和49年9月30日まで
ロルフ・リングレン	言語生活に関する研究	昭和48年10月1日から
ストックホルム大学生 (スウェーデン)		昭和49年9月30日まで
マーク・ブルネ	日本語の代名詞の研究	昭和48年7月1日から
モナシユ大学生 (オーストラリア)		昭和49年1月20日まで
イエンズ・リックマイ ヤー	日本語の教授に必要な文法	昭和48年7月1日から
ハンブルグ大学卒 (西ドイツ)	上の問題をテーマとする研 究	昭和48年12月20日まで

2 内地留学生

氏名	勤務職名	研究題目	研究期間
村田芳雄	埼玉県比企郡吉見町 立東第二小学校教諭	読みにおけるこ とばのきまりの 指導	昭和48年4月1日から 昭和49年3月31日まで
児玉寿一	松戸市立北部小学校 教諭	児童の意欲的な 読書の構えを育 てる指導	昭和48年4月1日から 昭和49年3月31日まで
湯沢正範	長野県上伊那郡箕輪 町立箕輪中学校教諭	認識思考の展開 としての文章構 造の研究	昭和48年4月1日から 昭和49年3月31日まで
佐藤金作	佐倉市立佐倉第一小 学校教諭	主体的な読解・ 読書をするには どのようにした ら効果的か	昭和48年4月1日から 昭和49年3月31日まで
長谷川勝彦	名古屋市立荻山中 学校教諭	主体的な読みを 育てる読書指導	昭和48年10月2日から 昭和48年11月29日まで
明星 貢	新潟県加治中学校 教諭	読書指導	昭和48年11月12日から 昭和48年11月16日まで

VI 日 記 抄

1973. 4. 4	ハン・ミエコ南カリホルニア大学教授来訪
13	第203回常置委員会ならびに世話人研究所との合同会議 (東大医科学研)
25	ソーン・ツェフ ソビエト科学アカデミー東洋研究所副所長来訪
5. 7	第25回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議総会世 話人会(A・A研)
6. 7~8	第32回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議(大磯)
8	第25回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議(大磯)

- 8 文部省所轄研究所長会議（大磯）
- 〃 各省直轄研究所長連絡協議会（計量研究所）
- 13 文化庁附属機関庶務・会計部課長会議（国立教育会館）
- 14 第82回国語研究所評議員会（如水会館）
- 27 各省直轄研究所長会議（計量研究所）
- 7. 9 第2回ブラジル日本語教師研修団来訪
- 11 エリノア・H. ジョーデン コネル大学言語学教授来訪
- 9. 29～30 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第3部会
（神戸大学経済経営研究所）
- 11. 1～2 第24回文部省所轄機関事務協議会（国立赤城青年の家）
- 14～15 文部省所轄研究所長会議（高エネルギー）
- 16 文部省所轄研究所事務協議会（東文研）
- 20～21 第24回文部省所管研究所第3部事務協議会（有馬）
- 26 地方研究員全国協議会（私学会館）
- 12. 5 東洋研究言語学者アルバート氏来訪
- 20 創立記念日
- 1974. 1. 26 国立国語研究所研究発表会（岩波ホール）
- 2. 7 国立国語研究所研究報告会（鶴岡市）
- 20 長崎県教育センター指導主事篠崎久躬氏来訪
- 〃 東独ライブチッヒ言語研究所長ボルフガング・トライシャー氏来訪
- 25 聾児の言語指導方法に関するシンポジウム（仙台）
- 3. 11 文化庁附属機関長会議（文部省）
- 13 岡山県教育センター指導主事 茅原栄二氏来訪
- 14 第83回国語研究所評議員会（如水会館）
- 18 附属機関会計担当課長会議（京都）
- 20 各省直轄研究所長連絡協議会第48年度定例会（農林年金会館）

昭和49年 8 月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区西が丘3—9—14
電話東京 (900)3111(代表)

UDC 0 5 8 8 0 9 . 5 6

NDC 8 1 0 . 5

本書の市販品発行所

東京都新宿区納戸町40 (260) 5281

株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	品切れ
2	言 語 生 活 の 実 態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 ——用 法 と 実 例——	〃	700円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——鶴岡における実態調査——	〃	600円
6	少 年 と 新 聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	品切れ
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	200円
8	談 話 語 の 実 態	〃	品切れ
9	読 み の 実 験 的 研 究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 識	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語 (前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語 (後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	400円
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	品切れ
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	〃
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) ——対話資料による研究——	〃	800円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	品切れ
20	同 音 語 の 研 究	〃	550円
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) ——総記および語彙表——	〃	1,000円
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) ——漢 字 表——	〃	1,000円

23	話 し こ と ば の 文 型 (2) ——独話資料による研究——	秀英出版刊	品切れ
24	横 組 み の 字 形 に 関 す る 研 究	〃	350円
25	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (3) ——分 析——	〃	1,000円
26	小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達	明治図書刊	2,100円
27	共 通 語 化 の 過 程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	品切れ
28	類 義 語 の 研 究	〃	750円
29	戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活	〃	400円
30-1	日 本 言 語 地 図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日 本 言 語 地 図 (2)	〃	〃
30-3	日 本 言 語 地 図 (3)	〃	〃
30-4	日 本 言 語 地 図 (4)	〃	8,000円
30-5	日 本 言 語 地 図 (5)	〃	9,000円
30-6	日 本 言 語 地 図 (6)	〃	
31	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	〃	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅱ) ——新聞の用語調査の処理組織——	〃	450円
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	450円
36	中 学 生 の 漢 字 習 得 に 関 す る 研 究	〃	5,000円
37	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査	〃	1,300円
38	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅱ)	〃	2,800円
39	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅲ)	〃	700円
40	送 り が な 意 識 の 調 査	〃	1,500円
41	待 遇 表 現 の 実 態 ——松江24時間調査資料から——	〃	900円
42	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅲ)	〃	1,200円
43	動 詞 の 意 味 ・ 用 法 の 記 述 的 研 究	〃	5,000円

44	形容詞の意味・用法の記述的研究	秀英出版刊	3,000円
45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(Ⅳ)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)	"	600円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)	"	3,000円
49	電子計算機による国語研究(Ⅴ)	"	700円
50	幼児の文構造の発達 ——3歳～6歳児の場合——	"	1,000円
51	電子計算機による国語研究(Ⅵ)	"	1,000円
52	地域社会の言語生活 ——鶴岡における20年前との比較——	"	
53	言語使用の変遷 ——福島県北部地域の調査——	"	

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語彙調査 ——現代新聞用語の一例——	"	品切れ
3	送り仮名法資料集	"	"
4	明治以降国語学関係刊行書目	秀英出版刊	300円
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	品切れ
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,100円
7	動詞・形容詞問題語用例集	"	1,700円
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	"	500円
9	牛店安愚楽鍋用語索引	"	

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	"	750円
3	ことばの研究 第3集	"	800円
4	ことばの研究 第4集	"	1,300円
5	ことばの研究 第5集	"	1,300円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和 24 年度	品切れ	13	昭和 36 年度	160円
2	昭和 25 年度	〃	14	昭和 37 年度	160円
3	昭和 26 年度	160円	15	昭和 38 年度	250円
4	昭和 27 年度	品切れ	16	昭和 39 年度	品切れ
5	昭和 28 年度	240円	17	昭和 40 年度	250円
6	昭和 29 年度	200円	18	昭和 41 年度	300円
7	昭和 30 年度	品切れ	19	昭和 42 年度	300円
8	昭和 31 年度	220円	20	昭和 43 年度	350円
9	昭和 32 年度	200円	21	昭和 44 年度	400円
10	昭和 33 年度	品切れ	22	昭和 45 年度	400円
11	昭和 34 年度	〃	23	昭和 46 年度	450円
12	昭和 35 年度	350円	24	昭和 47 年度	450円

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭和 29 年版	品切れ	昭和 39 年版	980円
昭和 30 年版	〃	昭和 40 年版	1,100円
昭和 31 年版	〃	昭和 41 年版	1,100円
昭和 32 年版	〃	昭和 42 年版	1,100円
昭和 33 年版	〃	昭和 43 年版	品切れ
昭和 34 年版	〃	昭和 44 年版	1,500円
昭和 35 年版	550円	昭和 45 年版	1,500円
昭和 36 年版	800円	昭和 46 年版	2,000円
昭和 37 年版	品切れ	昭和 47 年版	2,200円
昭和 38 年版	〃	昭和 48 年版	2,700円
		昭和 49 年版	3,800円

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	品切れ

1973—1974
ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1973 to March 1974

Study of Modern Japanese Grammar

Contrastive Study of Dialect Grammars

Study on the Process of Pronunciation

Brain Mechanisms Underlying Visual Pattern Recognition

Study of Vocabulary (Synonyms)

Compiling and Publishing the Linguistic Atlas of Japan

Comparative Study on the Variations of Language Behavior
between Various Social Groups

Dynamic Research on Language Abilities of Modern Elementary
School Children and Middle School Pupils

National Survey on Pre-School Children's Language Ability

Study on the Expressional Function and the Communication Effect
of Japanese

Study on the Language of the Meiji Period

Analytic Study of Language Data by Computer

Lexical Study on Works of Sôseki and Ôgai

Basic Study on the Relation between Language and Social
Structure

Linguistic Sociological Study on Kinship Vocabulary of Japanese
Dialects

Study on the Writing System of Modern Japanese

Statistical Investigation of Newspaper Vocabulary

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO